

流域の人々と歩む月刊誌

# くまがわ春秋

2018  
**8**  
第29号

## 特集・水害を考える



昭和40年7月4日 人吉市

魚住写真館提供



昭和38年8月20日 旧・坂本村

撮影/東儀一郎

火の国、水の国、  
焼酎の国。

球磨焼酎

織月



前門 宇梶剛士



世界的な品評会で  
金賞を受賞いたしました。

Los Angeles  
Wine & Spirits  
Competition 2018

飲酒は20歳未満者から飲酒禁止は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に悪影響を及ぼすおそれがあります。

織月酒造株式会社  
http://www.sengetsu.co.jp/  
〒868-0052 熊本県人吉市新町1基地

月刊 くまがわ春秋 第29号 2018年8月15日発行  
企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社  
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号  
http://www.hitooyoshi.co.jp/ info@hitooyoshi.co.jp  
TEL 0966-23-3759 / FAX 0966-23-3759

定価 540円 本体 500円

雑誌 81779-08-8



4910817790888  
00500

# 最近のおもな出来事

- 7月16日(月)
  - ▽長編ドキュメンタリー映画「筑波海軍航空隊」上映会(人吉市東西コミセン)
- 7月21日(土)
  - ▽戦争を語り継ぐ「森隆義さんのお話を聴く会」(人吉市東西コミセン)
- 7月25日(水)
  - ▽日本遺産セミナー(湯前町農村環境改善センター)
- 7月28日(土)
  - ▽「人吉まいてつ祭り2018」(29日、人吉駅前通り)
  - ▽第29回リバーフェスティバル「サガラッパ祭」(相良村柳瀬河川敷)
- 8月1日(水)
  - ▽人吉海軍航空基地資料館(山の中の海軍の町にしきみつ基地ミュージアム)開館(錦町木上)
- 8月4日(土)
  - ▽永国寺「ゆづれい祭り」(人吉市土手町)
- 8月10日(金)
  - ▽青井阿蘇神社「夏越祭」(人吉市同神社)
- 8月12日(日)
  - ▽九日町なつえびす「盆踊りと100円焼酎フェス」(人吉市九日町中心部)

# 今月の一言

『文読む月日』(レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳)より

善を行うのは喜ばしい。自分の行った善を誰も知らないことがわかったら、その喜びはますます増大する。

## 表紙写真

### 球磨川流域の大水害の記憶

① 昭40年「七・三水害」の洪水時(7月4日撮影、人吉市上青井町の様子。魚住写真館提供) ② 36頁参照。



③ 昭38年8月20日の豪雨による旧・坂本村の木々子地区の被害の様子。(撮影/東儀一郎)

## 8月(第29号) 目次

- 巻頭言「アツイ夏」 桑原史佳…2
- 旧くまがわ荘が交流館に…3
- 代行バス乗車体験記…4
- 「八代の禅宗寺院とその寺宝」 石原浩…6
- 地域探訪③「坂本町大門地区」…8
- 駅・ものがたり②⑨「村所驛」 松本晋一…12
- 石橋を訪ねる⑫「水俣の石橋」 上村和代…19
- 柳人があじわう漱石俳句⑳「いわさき楊子」…23
- 建築みてある記㉔ 森山学…24

## 特集・水害を考える

- 昭和40年「七・三水害」の記憶…36
- 父ちゃん!全滅ばい! 宮原信晃…37
- 西瀬橋流される 刈田智子…39
- ダムはムダ 尾方憲二…41
- 麦島勝の世界「水害」…43
- 肱川の水害から考える① つる詳子…44
- 雨と共に学ぶ 椎葉直美…50
- 昭和57年の夏 淋俊二…52
- 人吉藩の大水害① 尾方保之…54



- くまがわの神さん仏さん⑭ 宮原信晃…28
- 「安楽院」について 緒方雅子…31
- あがっ段⑳ 上杉芳野…32
- 夏目友人帳のふるさと巡り③…34
- 記憶の落ち穂⑳ 坂本福治…35
- 倉敷便り⑳ 原田 正史…58
- 鶴鶴短歌会 七月詠草…61
- くまがわすじの考古地誌① 木崎康弘…62
- 天草の「五足の靴」④ 富永和信…66
- 「老いらん」道中⑤…68
- 東喜代雄…68/花田淳…69
- 方言を味わう⑳ 前田一洋…70
- 「ウルトラマンはなぜ偉いのか」 久馬俊…72
- いもご短歌会…74
- 漢和字典は面白い⑫ 鶴上寛治…75
- 小説・相良清兵衛⑧ 山口啓二…76
- マイ・文庫本「離陸」 上村雄一…80
- くまがわ学習塾⑳…83
- 外来語から学ぶ英単語⑳ 藤原 宏…84
- ひるしの…げっかん・ぎひょう…84
- 今月の秀句⑱ 永田満徳…85
- くまがわ学習塾⑱の答え…86
- おっとわつとあずび⑱ 松舟博満…87

本誌の  
取扱店舗

■清藤書店 ■ブックスミスミ ■明屋書店 (錦店・免田店・多良木駅前)  
■道の駅さかもと ■TSUTAYA 八代松江店

# 旧くまがわ荘が交流館に



休憩所からは球磨川が一望できる



エントランスホールには市房杉に書かれた人吉球磨の魅力伝えるメッセージが(上)

「人気のあった温泉も復活しました。ぜひ、お出かけください」とスタッフの井上さん(左)

## 地方創生の新拠点

### 人吉市まち・ひと・しごと総合交流館

日本遺産をはじめとする観光振興の拠点、地域の活性化や雇用の創出による経済振興に寄与

することを目的とする「人吉市まち・ひと・しごと総合交流館」が、旧国民宿舎くまがわ荘(相良町)の建物内にオープンした。

7月28日には関

係者など約45人が出席してプレオープン式典のテープカットも行われた。第1期整備として人吉球磨地域の日本遺産構成文化財やその他の観光資源の情報を発信するほか、温泉施設などの運営、起業および創業支援や商工振興の情報収集と発信などの業務を行う。

## アツい夏

今年の夏はとにかく暑い。朝、愛犬の世話をするのに、頭から顔から汗の水滴が落ちてくる。「命にかかわる猛暑です」とテレビのアナウンサーはとても真剣な表情で私たちに呼びかけている。私が熊本に帰った来た30年前は、こんなに暑くなかった気がする。30℃になったら大騒ぎをしていたような。近年は午前中に30℃を超えてしまい、最高35〜36℃が普通の毎日。球磨盆地だから暑いのは仕方ないが、他県においては40℃を超す地域もあるようで、日本全国体温と変わらないとはなんとも息苦しい感じだ。地球はどうしてこんなに暑くなってしまうんだろうと思いつながら、さらに熱い空気の塊の車に乗り、出張に出かけると、心遣いか冷凍庫に入ったようなキンキンに冷やしてくださっているところもある。最初は気持ちよいが、比較的暑い部屋で仕事をしている私にとって、そこは試練の場へと化していく。そして夏風邪へと体調が崩れていく。

話は変わるが、先日、日本遺産人吉球磨観光地域づくりの若手事業者のエリアミーティングに声をかけていただき、参加した。上中下球磨の3つのエリアに分けての会議だ。私が参加したミーティングには25名の様々な職業の人が集まっていた。知っている顔もちらほら。進行の人はグループに分かれた参加者に3分程度の発言の時間を与え、「よく聞こう」「短く話そう」「書き留めよう」のお約束のもと、テンポよくワーキング会議を進めていく。程よい時間にそれぞれの思いを凝縮しながら人吉球磨の熱いトークが繰り広げられていく。私の「こんなことをしたい」の発言に、同じ思いを抱いていた人達に巡り合えたのが大きな収穫だった。その人たちの頭の上にマンガに出てくるようなぴかりと光る豆電球が見えたような気がして、なんだかうれしくなった。人吉球磨を土台に新たな宝の原石が見つかるような予感があった。賛同する人たちが集まり、意見を出し合い、かたちになっていけばすごいだろうな。この夏がますますアツくなりそう。

(桑原史佳)

# 代行バス乗車体験記

7月6日の大雨で、JR肥薩線の鎌瀬駅と瀬戸石駅の間で土砂崩れが発生。同線は運休になり、同10日から同17日まで代行バスが運行された。平成27年(2015年)8月25日の台風15号による土砂崩れによる運休以来の代行バスである。このときには、8月31日から25日間、代行バスが走った。停車駅は、前回も今回も、段・坂本・白石・勝地・渡・人吉であった。



利用状況を確認するために、代行バスを利用してみた。代行バスにはトイレがないので、水分を控えて、乗車した。

八代駅を基準にすれば5時03分、6時41分、16時22分、17時57分の4便で、人吉駅発八代行は、人吉駅を基準にすれば、5時16分、6時23分、15時36分、18時35分で、同一日に往復用にバスを利用するのは容易ではなかった。5時



八代駅

03分や5時16分はあまりにも早すぎる。次に、停車駅が限定されている結果、完全な意味での代行というわけではなく、停車駅以外の駅を利用しては乗客は相当に不便であったにちがいない。

バスの運行は慎重であった。特に、乗客確認は慎重に実施されていた。乗り遅れる人が出ないような配慮があった。バスは同時に2台利用されていたので、正確な乗客

数は確認できないが、多くて15人前後であった。観光客らしき人は見なかった。大半の乗客は外をみることなく、静かに乗車していた。バスの運行ルートは固定していないのか、坂本橋を利用せず、中谷橋だけを利用する例と坂本橋を利用する例もあった。以上は7月12日の記録

である。土砂崩れ箇所状況をみると、肥薩線の再開は早すぎたような気がする。

(春秋)



人吉駅

## バス代行時刻表【平日のみ】

肥薩線(八代~人吉間)

【八代 → 人吉方面】		【7月10日(火)~当座の間】			
駅名		①号車	③号車	⑤号車	⑦号車
八代	発	5:03	6:41	16:23	17:57
段	発	5:17	6:55	16:27	18:11
坂本	発	5:23	7:01	16:43	18:17
粟本	発	↓	↓	↓	↓
鎌瀬	発	↓	↓	↓	↓
瀬戸石	発	↓	↓	↓	↓
海路	発	↓	↓	↓	↓
吉尾	発	↓	↓	↓	↓
白石	発	5:53	7:31	17:13	18:47
球泉洞	発	↓	↓	↓	↓
一勝地	発	6:10	7:48	17:30	19:04
那良口	発	↓	↓	↓	↓
渡	発	6:18	7:56	17:38	19:12
西人吉	発	↓	↓	↓	↓
人吉	着	6:29	8:11	17:59	19:27

【人吉 → 八代方面】		【7月10日(火)~当座の間】			
駅名		②号車	④号車	⑥号車	⑧号車
人吉	発	5:16	6:23	15:36	18:35
西人吉	発	↓	↓	↓	↓
渡	発	5:31	6:38	15:51	18:50
那良口	発	↓	↓	↓	↓
一勝地	発	5:39	6:46	↓	↓
球泉洞	発	↓	↓	↓	↓
白石	発	5:56	7:03	↓	↓
吉尾	発	↓	↓	↓	↓
海路	発	↓	↓	↓	↓
瀬戸石	発	↓	↓	↓	↓
鎌瀬	発	↓	↓	↓	↓
粟本	発	↓	↓	↓	↓
坂本	発	6:26	7:33	↓	↓
段	発	6:32	7:39	↓	↓
八代	着	6:46	7:53	↓	↓

※道路事情等によって到着が遅れる場合や、雨天により、代行場合がございますので予めご了承ください。



復旧工事中の肥薩線の現場

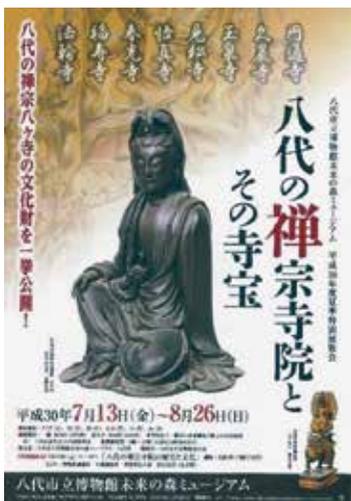
# 八代の禅宗寺院とその寺宝

八代市立博物館未来の森ミュージアム学芸員 石原 浩

八代市立博物館未来の森ミュージアムでは、平成30年度夏季特別展「八代の禅宗寺院とその寺宝」を開催しています。これは八代の禅宗全8ヶ寺の協力を得て、「仏像」「仏

画」「頂相」「墨蹟」など禅宗ゆかりの文化財45点を紹介するもので、寺院の歴史を紐解き、禅宗文化の魅力を探ります。

八代における禅宗の歴史は、南



ポスター中央 銅造白衣観音坐像 中国・明時代 玉泉寺所蔵

北朝時代末期、懐良親王の菩提寺として創建された「悟真寺《曹洞宗》」にはじまります。その後、室町時代から江戸時代前期にわたり、武家の菩提寺として「春光寺《臨済宗》」「福寿寺《禅宗》」(以

上松井家)、「久巖寺《曹洞宗》」(村上家)、「見松寺《曹洞宗》」「円通寺《禅宗》」(以上相良家)が建立されました。武家と禅宗の関係の深さがうかがえます。かつて真言律宗 西大寺派として繁栄した「玉泉寺《臨済宗》」は室町時代末期以降衰退しますが、江戸時代になって諸尊はそのままだに臨済宗として復興します。「法輪寺《臨済宗》」は昭和35年創建、八代で最も新しい禅宗寺院です。

本展で印象に残ったこと、それは衰退した寺院を復興した禅僧や庇護者の篤い信仰です。例えば、松井家の姫君によって復興を遂げた寺院。松井寄之の妻と妹は、城下に荒廢した寺院を見つけ、その復興を願いました。特に妹の桂光院は、幼

くして亡くして娘の冥福のため多くの浄財を寄進、娘の法号から「妙雲山福寿寺」と名づけました。その本尊・聖観音菩薩坐像は、運慶

作の仏像と見まがうほどの美しさ。まさに松井家の菩提寺ならではの仏像だったのです。

一方、禅宗独自のネットワークに



木像聖観音菩薩坐像 江戸時代 福寿寺所蔵

よつてもたらされた仏像もあります。江戸時代初期の長崎は、隠元をはじめ中国の渡来僧が居住していました。彼らは中国と同じ生活スタイルを理想としたことから、中国

本展覧会では、長崎から広まる禅宗ネットワークの一端を八代に確認できたこと、また運慶作に肉薄する仏像が松井家ゆかりの寺院に伝来することなど、禅宗文化の魅力再発見の展覧会となっています。

【いしはら・ひろし／八代市】



木造観音菩薩坐像 江戸時代 見松寺所蔵

の文物が直輸入されました。また長崎では中国人の指導のもと中国風の仏像が制作されるようになりました。このような背景のもと、玉泉寺伝来の「銅造白衣観音菩薩坐像」(中国・明時代)や見松

八代市立博物館

平成30年度秋季特別展覧会

「八代の禅宗寺院とその寺宝」

◆会期

開催中～8月26日(日)まで

◆会場

八代市立博物館未来の森ミュージアム

# 八代市坂本町大門地区

坂本町藤本地区（本誌26号 22頁参照）の直近の上流地区。藤本小学校横の小路を境に両地区は分かれるが、整然と分かれているわけではなく地形的には大門地区にみえても藤本地区に属する場所もあるなど、

他所の人には両地区の境がどこなのかはひどく分りにくい。都市部では隣の家が別地区であることは稀ではないが、田舎はちがう。

隣の藤本地区には村社の五社宮がある。大きな神社で、そのそば

に「大きな門」があったことが「大門」の地名の由来とされている（『八代郡史』435頁）。しかし、同地で球磨川が大きく蛇行している（大きな角になっている）という、その地形上の理由にその地名は由来すると考えるべきである。大きな門がかつて実際に存在していたとしても、それ以前から同地域は存在するのであって、大きな門が建設される前にはどのように呼ばれていたのか、直ちに問題になるが、以前の名前を推測させる資料は残っていない。そうであるなら地形に地名の由来を求めるのが自然である。

地名由来は別にして、同地区が五社宮のある藤本地区と並んで旧上松求麻村（旧坂本村の一部）の重要地域であった。一つの有名な鰐



同地域で球磨川が大きく蛇行している。そのため、ここでは網を繰って（ひきよせて）船を引き上げていた。そこで、そこを「網繰りの瀬」という



金比羅宮

口（観音堂と薬師堂の鰐口）はその傍証である。両者は戦国大名になろうとしていた相良支配の時代のもので、相良の活動範囲を示すものとして重要であるだけでなく、鰐口文化を考えるうえでも貴重。金比

羅宮、稲荷神社、上松中学校、八代東高坂本分校なども同地にあったし、前2者は現存する。

## 金比羅宮

「網繰りの瀬」の正面にある。祭

りは旧暦3月10日。昔は、地域総出で球磨川の川原に舞台をつくって賑わった。肥薩線が開通する明治41年頃までは八代・球磨両者の船乗りの神様として大切にされた。

## 観音堂の鰐口（県指定文化財）



正平18年(1363年)作。当初、天草・牛深の久玉神社に奉納、それが相良の戦利品として、この地に持ちこられたもの。どの戦いで、どの経路で、この地に落ちたのかは不明。正平18年は相良第6代定頼(さだより)の時代にあたり、南北朝の動乱期で、球磨郡内も統一されていない。調べてみたが、その当時、相良が天草に渡って戦ったことを調べきれなかった。その子の前瀬(さきより)が、今川軍(了俊)と、元中4年(1387年)に、天草、八代、芦北で戦った記録はあったが、そのとき鰐口を牛深から戦利品として相良が得たという記録は見当たらない。

## 薬師堂の鰐口（県指定文化財）



弘和元年(1381年)作。当初、島津支配の大隅国妙楽寺に奉納され、応永19年(1412年)には北原支配の日向国の真幸院千光寺に納められている。島津は最初から強国であったようにみえるが、必ずしもそうでなく、他国から侵略を受け、鰐口を奪われることもあった。島津の鰐口が北原家のもとに移動した経緯は確認できないし、北原のものが相良に渡った経緯の詳細も不明だが、なんらかの戦いで北原が敗北し相良が勝利し、最終的には相良の戦利品として、この地に運ばれた。応永年間には相良第8代実長(さねなが)の時代で、実長は応永6年(1399年)、日向国真幸院に出陣し、田之上城を攻撃し島山直頭(ただあき)配下の者を破っていることから、このとき鰐口を戦利品として得たのかもしれないが、真幸での戦いは多く、この地に鰐口が至った正確な経緯は確認できない。

## 稲荷神社

金比羅宮の隣には（つまり、綱線りの瀬の前に）稲荷神社がある。「正一位」であるから、すごい。「正二位」はおそらく地元の人が自由に名づけたのであろう。川船の商売の繁盛



稲荷神社。58段の階段がある

を願って建立されている。管理者は同地区の稲荷正一さん。つまり「稲荷」の「正一」さんである。嘘のような話だが、同社は、最近、建立されたのではない。同社の正面と参道はよくみると直線的ではない。藤本五社神宮もそうである。以前は



ちがう場所に参道があった可能性がある。  
ある。

## 中学校と高校

前記のように、同地区には中学校（坂本村上松中学校）があった（昭和22年4月1日開校、昭和



八代東校坂本分校の体育館（昭和50年頃）

50年3月31日閉校）。同校には分校もあり（中津道分校）。昭和22年4月1日開校、昭和50年3月31日閉校）。分校には球磨郡球磨村の川島地区、楮木地区の生徒たちも通学していた。入学式、卒業式、運動会は大門地区の本校で開催されてい

たので、分校の生徒たち（たとえば、球磨村の川島地区の子どもたち）は入学式などが相当に苦痛であったろう。本校の生徒と分校の生徒は、よくみられるように、仲はずしもよくなかった。

更に熊本県立八代東高等学校の

（春秋）

坂本分校もあった（昭和22年4月1日開校、昭和55年3月31日閉校）。旧坂本村の学生を前提につくられた分校だが、坂本外（たとえば、八代市）からの通学生が多かった。



八代東校坂本分校校舎（昭和50年頃）



記念碑



体育館跡（道の駅坂本から撮影）

# 球磨川の駅・ものがたり

河口から上流まで、その駅を訪ねる



連載その29 旧国鉄自動車日肥線・村所驛

熊本産業遺産研究会 松本晋一

この「球磨川の駅・ものがたり」は「球磨川の流れ」からすると、次は球磨川の源流、古屋敷方面に駅が欲しい所だが、次の村所驛は市房山の南、横谷峠を越えた先に在る。球磨川水源方面（古屋敷）への路線（バス）は前回すでに記述しておいた。



湯前駅終端の車止め

写真は、くま川鉄道の湯前駅終端、車止め方向。シンボルアーチのその先が横谷峠、昔の日肥線（日向と肥後を結ぶ路線）への延長方向で、その遙か向うに横谷峠を望む。湯前から横谷峠上まで明治30年（1897）に馬車道が開通、米良の木炭は人吉へ、球磨米や球磨



横谷峠（中央左の凹部）

焼酎が米良に入ってきた。それ以前は横谷で取引されていたと言う。

昭和12年鉄道省発行の「鉄道旅行案内」「湯前」の項には、「ここから4kmの山峠を越えて日向に入り、一ツ瀬川の溪谷を伝って妻線の杉安に出られるが、その間60kmはかなり困難

な道で、相当経験家の選ぶコースである」とその道程の急峻さを示す記載がある。しかし、地図上では湯前・村所間の距離24・7kmに対し、その高低差はわずかに43・6mしかない。

湯前駅から次の村所驛まで、乗換え路線は鉄道ではなく自動車道の国道219号線上を運行する。村所驛への乗換は、駅の改札口右手に黄色の西米良村営バスの湯前駅バス停が在り、そこからの乗車となる。行先ボードには横谷峠越えで、その



湯前駅入口右手のバス停と村営バス



先の西米良村「村所驛」まで、平日は上り（村所駅行）3本、下り（湯前駅行）4本が運行されている。

## 村所驛

この村所驛（村所）は西米良村営バスの起点と終点駅、宮崎交通のバス路線（杉安峠・村所線）の起点・終点でもある。住所は宮崎県児湯郡西米良村大字村所96-1。標高は241mの位置にある。



横谷峠に行く村営バス（左端）



新築された村所驛

と日向の妻（妻線、大正3年開通）とを結ぶ予定線として日肥線の建設運動はその当時から注目視されていた。

その経緯はくま川鉄道・人吉温泉駅（本誌第15号）でも紹介したが、球磨郡史にも「湯前・杉安間の54kmは、すでに鉄路として当局の測量



村所驛待合所



旧省営自動車妻営業所か？(いすゞ BX91、BX95 型か?)

計画済み」との記載がある。昭和期の記録…昭和16年5月の湯前村長から鉄道省宛て陳情書の終段には「(前・中段略)、先ず定期自動車の運転一日も早く、而して鉄道の完成を待望致し居る所なり」と、鉄道よりも定期自動車の運行を先行

して欲しい旨を陳情している。その要望を受け、昭和19年2月には妻町に妻自動車区湯前支所が開設され、まず鉄道省の貨物自動車での営業が開始される。次いで昭和20年12月の自動車線米良線(妻・湯前間78km)の開通につながり、さ



横谷トンネル銘板 (昭55)

町の手前、一ツ瀬川の村所橋(昭和32年架橋)を渡ると、西米良の中央通り

は少し左にカーブ、その右手に新築された村所驛・物産館他の複合

現行のバス路線は湯前駅から横谷峠(横谷トンネル)を越え、板谷・かりこぼ・やまびこの4トンネルを潜り、この米良街道路線は村所までバスで48分(車で24分)、約23kmの距離である。この219号線の横谷トンネル(1608m)は昭和55年の開通、湯前線と同じく西松建設会社が施工しているのは偶然であろうか。

施設が見えて来る。

国道219号線(熊本市・宮崎市)と国道265号線(小林市・阿蘇)の交叉点は鶴地区の中心地で村所と呼ばれ、古老



現在の西米良通り(米良街道)



昭和35年の西米良通り

の話では昭和30年頃の炭焼き時代、西米良の人口は約7000人で、映画館(菅原東映)、パチンコ屋2軒、旅館(森山、松屋他)もあったが、現在は約1100人で往時の6分の1である。村所の由来は米良を治めた菊池氏の館「米良御所」が訛り、米良所から「村所」になったと

言われている。江戸期から米良と人吉の関係も深い。

### 鉄道線としての日肥線の経緯

湯前線開通5年前の大正8年当時、この鉄道予定線は九州南部唯一の横断線「日肥鉄道」と称し、肥後の人吉(肥薩線、明治41年開通)



杉安峡・村所線（村所驛）



路線表示板

時点での現況記述がみられる。従って、この日肥線は国鉄自動車による鉄道予定線の先行路線としての役割までであり、その後は鉄道路線としての進展は見られていない。

日肥線が鉄道路線として成立し得なかつた理由には…昭和6年の

満州事変等により、鉄道より先に横谷・久米の連絡道路の必要性が増しており、当時、この路線は産業・交通・通信・観光・軍事（航空機資材用ブナ林の搬出）等、各方面の重要道路で、鉄道路線を省営自動車によるバス先行路線としたこと。鉄道路線設計上、矢岳線より勾配は少ないが、鐵路による峠越えが困難であったと思われること。昭和初期の時代、自動車交通事業促進の時勢が優勢であったこと。すでに大正元年には吉都線が開通していたことなどが考えられる。

その後、JR九州バスとして

59年間存続したこの路線も、沿線人口の減少、自家用車の普及などにより、平成8年（1996）7月に村所から湯前方面路線が廃止、西米良村営バスに移行、村所から米良方面路線も平成10年（1998）3月末で廃止され、宮崎交通に移管されている。

現在、村所驛と西都とを結ぶ宮崎交通のバス路線（杉安峡・村所線）はヤマト運輸と提携してヒト・ものを運ぶ貨客両用エコロジーバス路線として、平日上下4本が村所・杉安・西都間を結んでいる。

本来の計画であれば、国鉄・妻線の杉安駅、この村所驛、九州脊梁を越えた湯前線の湯前駅、そして人吉駅とを結ぶ、この線が第二の九州南部横断鉄道線（日肥線）と

らには戦後の昭和21年6月、省営自動車の妻及び人吉営業所の開設につながることになる。そして27年7月、鉄道省営バスは日本国有鉄道（国鉄）バスとして人吉・湯前間の32kmが開通。筆者も人吉駅前から上村麓まで村所行きバスを利用したことがある。その時、バスの米良線の名称は「日肥線」と改称され、駅名の村所驛は国鉄自動車の駅名の名残りとして今も続いている。

### バス路線としての経緯

昭和31年（1956）の下関工事事務所20年誌（日本国有鉄道）の工事現況には、建設工事の予定線として「建設予定鉄道線略図及び湯ノ前―杉安50・8km」の記載もあることから、恐らくは予備的な



国鉄妻自動車営業所（いすゞ BX91 型新車 昭33）

鉄道路線として、すでに調査測量がなされていたものと推定される。

また、昭和53年3月発行の日本鉄道請負業史には、「なお、改正鉄道施設法別表九州之部には、熊本県湯前ヨリ宮崎県杉安ニ至ル鉄道として掲載されている計画線がある

にっぴせん 日肥線 宮崎県児湯郡方面から熊本県人吉市に至る国鉄自動車路線であって、所管する自動車営業所は宮崎県児湯郡妻町(妻)に、同支所は宮崎県人吉市宝来堂町(人吉)にある。



日肥線自動車路線図（昭35.11 鉄道辞典）

が、これは本線をさらに延長して湯前を起点とし、県境を越え西米良を経て、一ツ瀬川の支流に出て、妻線の終点である杉安駅と結び、九州南部の横断線を形成しようとするものであるが、湯前―杉安間は現在も着工に至っていない。」と、昭和53年



上原の石橋

# 水俣の石橋

上村和代

本誌23号10頁以下で掲載した「境橋」を除く水俣市に現存する石橋を紹介する。水俣市内の石橋は、ほとんどが旧薩摩街道に架かっていたものである。薩摩と肥後の国境という交通の要衝であったことから

## 上原(前田)の石橋

(水俣市小津奈木)

国道3号で津奈木町から水俣市に入つてすぐにあるドラッグストアを越した小川に架かる。季節によっては雑草とツル植物に覆われてい

も、耐久性のある堅牢な石橋が好まれたのかもしれない。  
近代に入ると埋め立てなどにより水俣の町は海側に広がった。現代の薩摩街道である国道3号が新しくできた町を通るようになったため、山越えのルートである旧街道は交通量も減り、場所によっては通行が困難なところもある。石橋が水俣地区における旧薩摩街道の目印のようになっている。

て、石橋とはわかりにくい。

同じ川の200メートルほど上流には「瀬戸の石橋」があるが、旧街道が国道や鉄道によって分断されているため橋にも近づきにくい。津奈木町との境界に位置しており、津奈木町では石橋造りの名手岩永



秘境巡りの米良稲荷

- 〔参考資料〕
- ・第41回帝国議会衆議院「日肥鉄道建設に関する建議委員会討議録(速記) 第3号」昭和8年2月19日 インターネット資料より
  - ・「鉄道旅行案内」鉄道省昭和12年6月 博文館
  - ・「下関工事事務所20年誌」日本国有鉄道 1956
  - ・「鉄道大辞典」下巻1958年3月 日本国有鉄道
  - ・「国鉄自動車30周年史」昭和36年8月 日本国有鉄道・自動車局
  - ・「高田素次「湯前町史」619頁陳情書他昭和15年 昭和43年11月
  - ・「西米良村史」同編纂委員会昭和48年10月 西米良役場
  - ・「国鉄妻線の一生」昭和62年8月1日 宮崎県西都市
  - ・熊本鉄道管理局編「線路は続くどこまでも」昭和62年
  - ・「新・球磨号」昭和63年2月 熊本日日新聞社
  - ・「ふるさとのみち 宮崎の街道」平成18年3月20日 宮崎県教職員互助会
  - ・前田一洋編「球磨・人古今昔写真帖」2011年 郷土出版社
  - ・平山謙一郎編著「熊本の駅と港」27 昭和58年5月 熊本日日新聞社
  - ・2016年西米良町カレンダー写真 むかしの建物など
  - ・インターネット資料・ウイキペディア 国鉄バス、国鉄バス路線名称館
- 資料提供・小野田滋氏 福井弘氏 筒井幸彦氏 村所驛 西米良語り部の会  
※前号(7月号)訂正  
11頁…上段最後の行…所要時間は約55分↓約45分  
12頁…下段右写真…駅職員7名↓8名

神社)も鎮座する。この西都・村所・湯前間は「幻の日肥線鉄道巡り」の

秘境観光路線にもなっている。(おわり)

三五郎の弟・三平の手による「瀬戸眼鏡橋」として町指定文化財になっている。橋の架かった年代や大



隈迫の石橋

きさも似通っており、上原の石橋も三平にゆかりがあるのかもしれない。

なお「三五郎の弟・三平」については、津奈木での活躍以外の記録がなく、三五郎との関わりについても、実弟ではなく義弟（妻の兄弟）とする説もあるなどその存在には謎が多い。

架橋…江戸末期  
橋長…10m 橋幅…4m  
径間…7m 拱矢…2.5m

### 隈迫の石橋

（水俣市初野）

国道3号沿い、新水俣駅に近い初野交差点そばにある。新幹線開通とそれにとまう道路拡張により2005年に元の場所より移設・

復元された。コンクリートによる補強と鉄パイプの手すりが設置されている。石橋としては、小ぶりであるが、力強さも感じる。

架橋…江戸末期  
橋長…3.7m  
橋幅…2.85m  
径間…3.35m  
拱矢…2.5m

### 新町の石橋

（水俣市陣内）

水俣みやげとして知られた「美貴もなか」の柳屋本舗の駐車場前を南へ進むと、道路が二股に分かれるところがある。そこで立ち止まり、右手を見るとその橋が見える。現在は民家と民家の間に取り残され、人が渡ることもない。輪石のみの簡

単な造りであるが、アーチの美しさと周辺の庭木などから二服の絵のような不思議な空間を作り出している。



新町の石橋

文政8年ごろに、それまで架かっていた土橋から石橋に架け替えられたと伝わるが、この橋がそうなら架橋から190年を超えた津奈木・水俣地区に現存する最も古い石橋かもしれない。

架橋…文政8年（1825）  
橋長…4.0m  
橋幅…3.0m  
径間…3.5m

### 坂口の石橋

（水俣市月浦）

近年は忘れられているが、水俣は和ロウソクの原料でもある「ハゼの実」の一大産地である。江戸時代、肥後藩の財政立て直しのためハゼが植えられた。中心地である侍地区では現在でも1万本以上のハゼが植



坂口の石橋

えられていて、実の生産高、国内シェアともに日本一だ。旧薩摩街道は、水俣市街地から山を越えて侍地区を通り、海側の袋地区へ抜ける。ハゼの栽培と加工についての資料館

# 柳人があじわう漱石俳句

— 29 —

いわさき楊子



冷水の石橋



冷水の石橋

(水俣市冷水)

国道3号で

水俣市街地を

抜け貝汁で知

られる料理屋を

越えたところに

あるホームセン

ターの裏手にあ

る。古くから

「侍街道 はげのき館」の前の坂道を下りきった右手に坂口の石橋が見える。

平成2年に河川工事のため川から少し離れた場所に移設・復元された。コンクリートで固め、擬木の手すりですめられた姿は、石造りの展

望所かなにかのようで、トンネル状のアーチのみが石橋の面影を残すのみである。多くの人が行き来したであろう街道の石橋の姿としてはさみしく見える。

架橋…嘉永3年(1850)

橋長…約5.3m

橋幅…約2.7m

地域を潤し、熊本県昭和の名水百選にも載る湧水池・冷水泉水(ひやすじせんすい)から流れ出る小川に架かる。

この橋も旧薩摩街道に架かり、今も周辺住民の生活道路として現役の橋だが、鉄パイプの欄干と雑草により石橋と気づく人は少ない。コンクリートで固め、アーチにもギブスのような鋼材の補強がされた姿は痛々しくもある。

架橋…江戸末期

橋長…6.8m

橋幅…3.4m

径間…4.8m

拱矢…3.1m

【うえむら・かずよ/人吉市】

— 恵比寿ビールを飲んだかも —

行けど萩行けど薄の原広し

(漱石32歳)

明治32年8月30日〜9月2日まで、五高の同僚・山川信次郎と阿蘇登山を試みている。いまとは違い観光道路などあるはずもなく、雨と灰にまみれて道に迷った。この句はそのときの描写だと推察される。

漱石は後年「二百十日」という短い小説を書いている。この阿蘇への旅を基にした小説だ。ほとんどが圭さんと碌さんの軽妙な江戸弁の会話で進行する落語のような小説だ。豆腐屋や鍛冶屋、気の利かない宿屋の姉さんなどを登場させて面白おかしく書き、華族や金持ちを皮肉った社会性にもじませる。

「ビールはござりませんばつてん、恵比寿ならござります」という宿屋の姉さんのくだりは有名。

秋暑し癒なんとして胃の病

(漱石32歳)

晩年漱石は胃の病に悩まされるが、この年にはじめて俳句に詠んでいる。

生き返るわれ嬉しさよ菊の秋

(漱石43歳)

晩年、修善寺の大患といわれる重篤な胃の病から、ひとまず回復したときに詠んだ。素直な嬉しさをそのままにした。

算数がヘタでも金持ちになれる

独り旅やはり下着は新しい

リサイクルするために飲む缶ビール

【お知らせ】漱石がこの旅で泊まったとされる阿蘇内牧の山王園で、今年の9月1日に第二回「二百十日」俳句大会(同実行委員会主催)が催される。つきは昨年の入賞句。

二百十日首寝違へてしまひけり 加藤いろは

【いわさき楊子/川柳と俳句の愛好家、熊本市在住】

# 「日奈久赤レンガ倉庫 レンガのひろば」をあるく

森山 学

八代市の日奈久温泉街に、大正十年（一九二二）建設の「日奈久赤レンガ倉庫」（写真①）があった。しかし

平成二八年熊本地震により被災し、昨年二月に解体された。そこで昨年度、「平成二九年度八



写真① 地震前の日奈久赤レンガ倉庫の正面

代市がまだしもん応援事業」の一環として、地域住民、熊本高等専門学校の学生ら有志とともに、左官職人Nさんに指導いただきながら、「日奈久赤レンガ倉庫 レンガのひろば」として再生させた。

この広場は日奈久温泉駅から徒歩約十分。種田山頭火が宿泊した現存唯一の宿屋と言われる「旧織屋」の隣にある。ここは明治三年（一八九八）に造成された新地で、日奈久旧港の目と鼻の先。

そもそもこの倉庫は塩干物を保存する氷室、うたせ船が水揚げする海老の乾燥場として利用されていたと言われる。解体前、壁の内側には何段もの棚を受けていた木片が残っていた。

また近年まで、裏の道路をはさんで八代地域農業協同組合日奈久支所

の倉庫群（そのうち肥料倉庫は大正二二年―一九二二に建設）が建っていて、一帯は港湾倉庫群を形成していた。これらのうち九号倉庫の部材の一部を再利用し、そのイメージを再現したものが「日奈久ゆめ倉庫」である（二〇二二年建設）。

日奈久はまさに港で発展した温泉街であった。漁村の潟に源泉を発見したのが応永一六年（一四〇九）。藩政時代には薩摩街道の宿駅だった一方、交易の津口に指定され、文化七年（二八一〇）から近年まで干拓・埋

立を繰り返してきた。うたせ船による伝統漁法が行われ、明治三〇年代に肥後汽船、天草汽船の定期航路が開通したほか、天草から舟で湯治にきて、舟に宿泊しながら共同湯に通ったとも伝えられている。

港から本湯（現ばんぺい湯）、または湯湯（旧西湯）・安西清の湯（現鏡屋旅館）といった共同湯に続く道は、背骨となる薩摩街道に直交する軸となっている。

残存唯一だった港湾倉庫、日奈久赤レンガ倉庫は、こうした日奈久温

泉街の発展の証しであった。

さらに倉庫としての役目を終えてのち、織屋の別館として使用されていたことから、山頭火ゆかりの建物と言っても過言ではなかった。最近ではまちづくりの拠点であった（写真②）。

日奈久赤レンガ倉庫は六メートル×十メートルほどの小さな倉庫で、正面の通りに対して軒を向ける切妻平入で、この地域の町家と同じ配置である。レンガの積み方はオランダ積みで、屋根を支える小屋組は木造トラスだった（写真③）



写真② 2005年に整備した倉庫内部



写真③ 木造トラス

が、トラスの陸梁には伝統的な大径丸太を使用していた。まさに和洋折衷。側壁は西洋近代の古典主義のデザイン



写真⑥ 広場全景



写真⑦ 倉庫にあった火鉢とベンチ



写真⑧ 水平アーチのモニュメント

であった。上部の三角形の壁にはエンタプラチュア、コーニス、鬼瓦風の突出、レイキング・コーニスを受ける



写真④ 旧織屋側から見る（側壁の三角形がペディメント、下辺の縁がコーニスとエンタプラチュア、斜めの縁がレイキング・コーニス）

学校の教員と学生のチームは、被害調査や復旧・保存の計画案を作成した。地元住民との会議を重ね、全体保存から部分保存へと計画案を変更していったが、所有者が安全第一を考へ公費解体を決定した。

解体決定後も、解体時に壁の立ち上がり四〇センチほどを残せないかを考えた。そうすれば壁をベンチとして残すことができる。しかし公費解体ではこれできない。そこで解体後のレンガを仮置きし、もう一度ベンチの高さまで積み上げて復原することを考えた。

小塔があり、これらに縁どられた三角形は、ペディメントと呼ばれる（写真④）。今回の被災では、旧織屋側のこのペディメントと呼ばれる部分が倒壊した。

窓には水平アーチを架け、扉のヒジを取りつける石材が堅柱四か所に据えられていた。正面入口の上にはまぐさ石が架けてあった。

このように小規模ながら西洋近代の材料、工法、とりわけデザイン様式を積極的に取り入れており、近代和風の旅館群と対をなしつつ、温泉街の発展期を見事に象徴する事例であった。建設年から見れば、関東大震災（大正二年一八九二）に建設）後の市街地建築物法施行規則の改正（大正三年一



写真⑤ 第一回ワークショップ。レンガからモルタルをはつる作業

一九二四）直前にあたり、これによりレンガ造建築が実質禁止されることから、日奈久赤レンガ倉庫は、レンガ造建築としては晩年期の建築と言える。

さて被災後すぐに、熊本高等専門

本物にこだわって、もとの壁の位置に、もとのレンガを、もとの積み方で五段積み上げてベンチにする。日奈久赤レンガ倉庫の広さを実感し、かつての倉庫を彷彿させる。レンガは地元で焼いたものと言われ、色も大きさも形も不揃いだが、それが本物の証し。

平場にはかつてのペディメントをかたどったレンガの舗装、ベンチをあえて作らなかつた部分にはかつての基礎が本物の存在感を示す。水平アーチのカケラはモニュメントとして残す。こうして今年の二月十二日に完成した（写真⑥⑦⑧）。

ぜひベンチに腰掛け、ありし日を思い出して下さい。この古くて新しいひるばの未来をつくって下さい。

【もりやま・まなぶ／高専教員 一級建築士、八代市】

# 隠れ念仏の秘仏が来た (後編)

宮原信晃

## 先月号のあらすじ

薩摩の国の筆頭家老が、こともあろうに後の藩主となる若殿に斬り殺されました。犯人は島津、斬られたのは伊集院。斬られた伊集院一族は都城にたてこもります(庄内の乱)。1年後、家康の仲介で伊集院は降伏しました。時は天下分け目の関ヶ原の戦いの半年前です。その2年後、島津は又しても伊集院の残りの全ての血因関係の者をことごとくこの世から抹殺しました。その時です。ある伊集院の家臣が秘仏を背負い暗闇に逃げたのです。

伊集院の家臣、北原善幸は暗闇の中にいました。主君伊集院忠棟も若殿忠真も島津の手に落ちました。

しかも、薩摩の国は「二向宗禁止令」を公布し、伊集院一族を身動き出来ぬようにしていました。

伊集院の主君は熱心な浄土真宗の門徒であり、大阪の石山本願寺(今の大阪城)の頭如上人より親鸞聖人の木像をもらっていたのです。実は親鸞聖人作の木像は二体あり、一体は現在の東本願寺に安置されていますので、もう一つの本物

の木像と思われる。その木像を主君忠棟が斬られる前に北原善幸が上洛した時に手渡ししていたのです。その木像を背負い薩摩の帖佐から今は亡き主君忠棟が暮らしていた都城へ向かいました。筆者の想像ですが軍資金を調達するために伊集院の家臣の関係者に会い、これからの行動を相談したのではなかったかと思われ。どこへ運ぶのか？

それは謎ですが、昔、秀吉から大閤検地を任ざれているときに加藤清正との深いつながりがあり、肥後へ向かい伊集院一族の敵討ちを模索しての行動だったのではと思われ。それから飯野、小林へ向かい、薩摩から出ている伊集院の追跡のおふれをかくぐり島津領日向と相良領球磨に隣接する吉田から矢岳へ

入り込んだようでした。

相良藩の関所である笹原番所の近くに大川間の内小谷という場所があり「高橋何某」という人の仏

壇に安置したと記録が残っています。

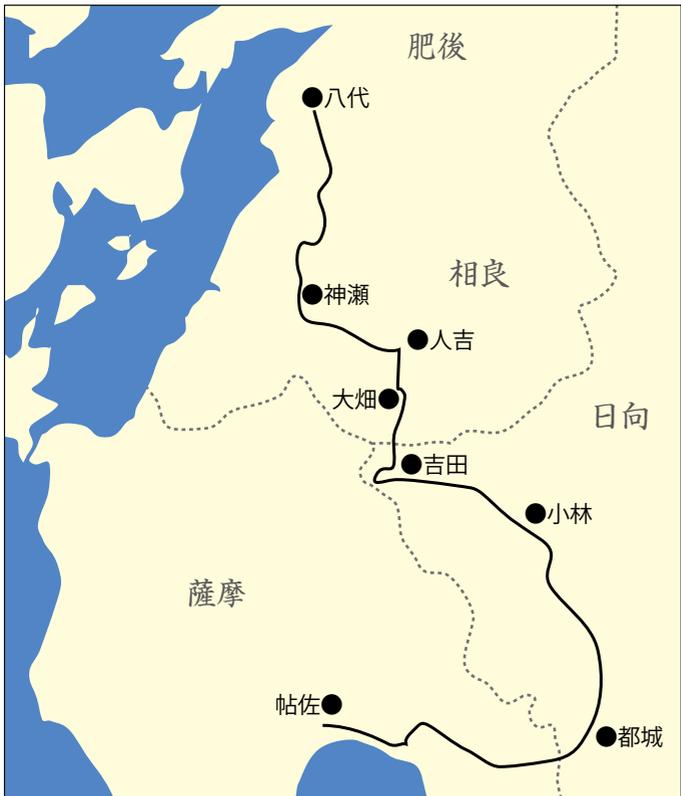
つばやの益田啓三さんに調べてもらった人物名は「高橋喜助」という

番所の役人でした。

あの時代の、この高橋喜助という確実な名がわかったのは正しくこの話が伝説ではなく、史実を残していたという証明になったものと思われ

ます。

大畑の三徳院へ移し漆田阿弥陀堂、赤池観音堂、田町、下林の祇園堂の天井に隠すという様に同じ場



帖佐から八代までの推定経路(上)と相良藩内の経路



所に安置出来ない状況になったようでした。「親鸞聖人の自作の木像」という隠れ念仏者にとっては命にも代えがたい、一生に一度の聖人様を拝めるとあって、安置された場所には相当数が出向いたようでした。その頃は、今の国宝となった青井阿蘇神社を建設している真っ最中でもありました。下林の祇園堂から



八代市正教寺にある親鸞上人の御木像

ようやく北原善幸は木像を背負い、次の目的地へ移動します。ここまで20年近くかかって移動してきたのではなかったでしょうか。相良藩は、1555年より一向宗を禁止しており、薩摩藩より厳しい藩内でした。「なむあみだぶつ」と深夜に年仏の声が聞こえると役人から捕らえられ一家、親戚、近所のものも処刑されてしまいます。念仏の声を押し殺して親鸞聖人の木像を拝んだと思われまふ。

神瀬の多武除という船着き場から球磨川を渡り、対岸の海路村へ着き八代の「正教寺」へと親鸞聖人の木像は納められました。時は

寛永四年(1627年)春でした。北原善幸が薩摩の帖佐を抜けて正教寺にたどり着くまで25年もの年月が経っていました。大阪冬の陣から10年も経ち、豊臣が滅んだ世の中になつていたのでね。

一時は相良長每や清兵衛に連絡をとり加藤家へ繋がる算段だったのでしようか。隠れ念仏の秘仏が隠された跡には、大歓寺(大畑)、洪願寺(田町)、樂行寺(林)、信証寺(神瀬)と浄土真宗仏光寺派の寺院が今も残っています。

参考資料…

八代市正教寺親鸞聖人木像伝来記

【みやらはらのぶあき／FBお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】

# 「安楽院」について

緒方雅子

6月号を読んでびつくりしてペンを執りました。八代市高下東町にある「安楽院」が載っていたからです。(第27号24頁参照)

(第27号24頁参照)

私は隣地に住んでおり、もう何十年も万年掃除当番と同時に私の心の安楽を求めて、朝夕のお参りを欠かしたことがない寺なのです。そんなことから

取り上げて下さったことに感謝すると同時に、少し追記させていただきます。

本堂の奥には50年に一度しか拝むことのできない「秘仏」様がおられ、私も20年前に一度拝んだきりです。

昔は旗が立ち並

び、奉納相撲や出店などあり、たいそう賑わっていたとのこと。今は夏休みのラジオ体操場として、また子どもたちの遊び場として使われているお堂ですが、地域の住民にとっては、「安楽院」ポツクリ寺」として、また病いや痛みにご利益があるとのこと、患部をさすりさすり、願い事をつぶやくながらお参りされておられます。

地震の際には、仏像を守ろうと周囲に座ぶとんを敷き詰めたりしましたが、何事もなくホッとしました。

3月12日、10月12日には大祭があり、手づくりの料理やお菓子などを持ち寄り、熊本市内から来られるお坊様を囲み、楽しい一日を過ごします。アジサイや彼岸花もたくさん咲いてきれいですし、ぜひ皆様方にお越しただけねと思っています。

【おがた・まさこ／八代市高下東町】





## 上杉芳野の「あがつ段」②⑥

# 感謝、感謝の チャリティーショー



当日の受付風景



台風の中、集まってくださった方々

7月8日に「上杉芳野と愉快な仲間達」でチャリティーショーをした。前日より台風の影響で風雨がひどく、球磨村の国道219号は土砂崩れが3ヶ所もあって車が通れなくなっていた。

頼みの綱の高速道路も閉鎖され、熊本市内や八代からお見えになるお客様が道

が通れないから、ここまでお越しに出来ない。

しかも出演して頂く熊本市内の「ザ・わらべ」(代表・中村花誠先生)のみなさんが、熊本からこの須恵文化ホールの会場まで来て頂くことが出来なくなっていた。

「わらべが来ない？」となれば、お客様の反応はいか

かなものかとヒヤヒヤしながら開幕を待った。

大雨の日にこの会場へ来て頂く方々は、相当に減って半分くらいかな〜と思って幕が開くと、何と立ち見こそないものの五百の席が満席なのであった。

今年の企画は昨年までのプログラムとは少し変更させて頂いた。一昨年まで30を越す団体の方々が参加され大盛り上がりしたのだが、プログラムの進行が遅れて時間が掛かりすぎてしまっていたのだ。だから30から25団体へと減らさせて頂いていた。しかし今日はザ・わらべが来ないとなると、大変な

ことになるのだ。

私達がこれまで以上に頑張って踊りや歌にと笑顔をお客様に届けなければなら

ない。  
司会者のお二人、竹原篤子さん、岩切功市さんの名



コンビが舞台挨拶。それから腹話術のケンちゃんがプログラム1番でスタートした。「ケンちゃん〜」と会場の皆さんが大きな声でケンちゃんを呼んだら、「はい」と手を挙げて会場から舞台へ登ってくる人がいる。

何と、私の旦那ではないか。「ケンちゃんと呼びやっ

で出て来たどばい。足は短

かかばつてん」と私の旦那

謙ちゃんが飛び入りしてく



れたのだった。「本当に短かかねえ〜」と、かん高い声の腹話術のケンちゃんの声に会場は大爆笑であった。次から次に笑い声の会場の中でプログラムは進み、これまで協力して頂いている多良木町の英語教師のジェームスが登場してくれた。彼はこの舞台が最後となるようで、いつもにないファイトで私のセリフに答えてくれる。会場のみなさんの大笑いが止まらない。

今年が目玉となった舞台は相良村の深水の女相撲であった。舞台狭しと女相撲取りさんが、土俵の上で名勝負の取り組みがあり会場の大爆笑をきこった。中学生の女の子のダンス、コーラスグループ、小中学生20名程の勇ましい太鼓など個人や団体の人達に出演して頂き、全てのプログラムは無事に終了した。会長である前田一洋さんも、私の早変わり3曲メロディーに飛び入りで出て来られ、鼻に紙を挟んで子象になりきって頂いた。あの雨、風の中、お越し頂いたお客様、出演して頂いた私の仲間達に、感謝感謝である。

【うそすぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

夏目友人帳のふるさと巡り ③

大畑駅

(入吉市大野町)

人里離れた高原にあり、ループ線とスイッチバックの組み合わせという全国でも非常に珍しい構造をした駅として、鉄道ファンの間では有名な駅。夏目友人帳では、人に化した子ギ



アニメの中の大畑駅 (© 緑川ゆき・白泉社 / 「夏目友人帳」製作委員会)



夏目ファンのためのノートが待合室に置いてある

ツネが列車に乗って主人公に会いに来る駅のモデルとして登場する。肥薩線の各駅には100年以上前の開業当時に建てられた古い木造の駅舎が多数残っているが、ここもその一つ。当駅で二休みした列車は、さらに険しい矢岳駅への勾配へ挑んでいった。スイッチバックを併せ持ったのは勾配途中に平坦な場所を設け、そこに停車場を建設するためだったという。昔、SLが走っていた時代に使われていた給水塔の跡なども残っており、見どころが多い駅。

さらば常田富士男さん

記憶の落し穂

その ②⑧

絵と文 / 坂本福治



常田富士男さんが亡くなった。私と同じ年。小三の時、長野県から小国に移住された。私の小三時が終戦で、北鮮から球磨に移ったのも似ている。常田夫人は、私より一日だけ早生まれである。川内市で河童大会があった時、談笑の時間があった。奥さんとのなれ初めは、常田さんが久々の里帰りをした時、同級の女性に会った。二人とも未婚だったので結婚することにした。詳しくは聞いていないが、「まだ結婚してなかったの？」という年齢だったらしい。奥さんは多くを話されなかったが、人を見る目がある、という印象だった。

私は二十代を東京で過ごしたが、常田さんを見たことがあった。お茶の水に「ジロー」という喫茶店があった。私は、話に夢中になっている若者たちの中から、絵になる人を見つけてはスケッチしていた。常田さんは、よれよれの野球帽をかぶり、目立たない服装を心がけておられた気がする。同年の知人の旅立ちには、とくにさびしさが深い。合掌

【なかもと・ふくじ / 画家、入吉市】



## 特集

# 水害を考える

## 昭和40年「七・三水害」の記憶



人吉市上青井町の様子。球磨川の増水が堤防を越えてきた。向こうに見えるのは永国寺の山か。下は水が引き始めたころの同地。（魚住写真館提供）



水被害が発生した。  
この時の球磨川  
流域における被害  
は、家屋の損壊・流  
失1281戸、床  
上浸水2751戸、  
床下浸水1万74戸  
と甚大な被害を受  
けた。

（編集部）

昭和40年（1965）の6月28日ごろから降り続いた雨は、7月2日の夜半ごろから流域の各地で豪雨となり、至る所で氾濫<sup>はんらん</sup>。特に人吉水位観測所では計画高水位を大幅に上回る水位を記録し、青井阿蘇神社楼門では基礎石のところまで水が押し寄せる大洪水となった。

八代市でも萩原橋下流右岸において堤防前面が崩れ、4戸が押し流されるとともに、前川堰も損傷。また、水無川からの氾濫などにより浸



上青井町の魚住写真館は1階の天井まで水が来て、家財道具や仕事で使うカメラなども全て水没した。タオルを頭に被っているのは、魚住一美さん。お隣の池田畳屋さんも畳などを全部濡らして大変のようだ。（魚住写真館提供）

## 父ちゃん！全滅ばい！

宮原信晃

小学校5年生の私は青井神社前にすむイタズラ少年だった。近所の犬の背中にまたがり、それ行けとばかりにロデオをしたり、小さな子供らを集めて運動会をしたりと朝から夜遅くまで、金比羅宮を基地にして球磨川へ下りたり堤防を走り廻ったりと、落ち着きのない少年だったと思う。

ある梅雨の日であった。

もう4〜5日も大雨が降り続いて球磨川が増水をはじめた。暗い早朝からけたたましいサイレンが何度も鳴っている。「後ろの道に水が入って来た」と母ちゃんが大きな声で教えてくれ、父ちゃんは家財道具を床板を剥いで重ねて乗せ、室内の四隅に設置している杉の木を少し動かして、次から次に家財道具を大人の頭の高さ以上に、天井に押しつけるように、何でもかんでも差し込んで、これなら、水が入っても下の少しくらいなら濡れてもよかたい作戦をとった。

唸るサイレン、前の道にもゴーターという音と共に急流の川が現れた。

「父ちゃん！ 水が来たばい！」

「ま、あわつんなー。ギャンときは待つとたい」と、動じない父ちゃん。

台所は物がプカプカと浮いて、畳を何枚も重ねて敷いた高さ以上に、あつという間に床上に濁流が押し寄せてきた。一台しかない治療室のベッドの上に姉・母・父、そして私。今にも押し流されそうな室内であった。

その時、父ちゃんが動いた。

「信晃、そんな床板ば、そつちば持て。よかや、そんな床板ば窓から出して隣の家の屋根に掛ける。そい！お前から行け。次は母ちゃんたい。悦子もこん板ば上れ！」。濁流と化した家の中も外も渦巻く水から、一枚の床板で隣の家の屋根へ、それから自宅の屋根へとつたつて上った。父65歳、母53歳であった。我が家の周りの遊び仲間の家の屋根にもそれぞれが上つて呆然と立ちすくんだ姿が見える。

そこへお盆に川に流す盆船が流れて来た。濁流の勢いは少し弱まり、盆船が我が家の前の家の下に漂着した。壁に

捕まって難を逃れていた椎葉さんちのヨシコちゃん(中学生)

がその盆船をつかまえた。そうこうしていると、「渡辺さんの家のおんなれん」と近所の者がみんなで心配した。

ヨシコちゃんが盆船に乗ってその隣の家の渡辺さん宅を覗くと、水面と天井の間に家族全員顔が見えたようだった。

「生きとんかった」とヨシコちゃん。

それを聞いた近所の宮川やつちゃん、何と増水した川(我が家の前の道路)に飛び込んで、美しいクロールで渡辺さんちまで泳いで行き、屋根に登って屋根板を剥ぎ、渡辺さんちの家族全員を助け上げたのだった。

宮川やつちゃんは中学1年生くらいだったか。

そうこうしていると、少し水が引いて来て盆船に私が乗って我が家のひさしから家の中を覗いた。

全ての家財道具がひっくり返り泥水の中に浮かんでいた。

「父ちゃん！全滅ばい！」と大きな声で私は父におめいた。

屋根の上から下を覗く家族の目には涙もない、悔しさとか、悲しみとかいう感情よりも、ただ驚きの光景であったろう。

水が引いたら裏の落合さんが歩いて帰ってきた。どこか

ら来たのかと聞くと「何枚も重ねた畳の上に座っていたら、家の外に畳ごと浮いて流れて行き、青井神社の池に落ちる前に、真つ直ぐ立っていた木にひよいとつかまって水の引くのを待った」と、ドラマか映画のような話を平然とされていたことを思い出す。

歩いて動ける程に水が引くのと同時に親戚の方々が駆けつけて頂き、家の中のド口を水道水で洗い流し始めてくれ

た。いつも水害の時にはお世話になる親戚のおじさん、おばさんの姿である。

親戚の方々がいないと、水害の片付けが出来ないのだ。水害常習地帯にはそれを助けて頂く親戚の方々のお力が一番大切だと思った。

みなさん、ありがとうございました。

【みやはら・のぶあき／人吉市下青井町】

## 西瀬橋流される

荻田智子

### 学校に行けない

昭和40年7月4日、自宅から西瀬小学校に行くためには西瀬橋を渡らなければならないが、大雨による濁流、ダム放流によつて橋が流された。四人の子供のために雨合羽が準備されていた。兄と私は小学四年と二年。

第二人は、青井幼稚園と保育園へと出かけた。父親が、

学校への舟通学のために薩摩瀬の神社に自動車を送つてくれた。

あの舟通学は、どのくらい続いたのかわからないが、楽しい思い出もある。そのうち、近所の職業訓練校が小学校の代わりの校舎になり、それまでの長い通学時間が五分ほどになり、本当に嬉しくてしかたなかった。

西瀬橋を使つての通学は遠く、道路がエスカレーターのように動かないかといつも思うほどであった。毎日、球磨川を眺めながらの通学であったが、水量が多く、緑色の深い色は時々、渦を巻いていた。すぐに夏休みとなり、急ピッチで木造の橋が建設されたのだが、歩行者と

自転車だけしか通れなかったと思う。いつも揺れて、とても恐ろしく、橋の欄干につかまりたい衝動にかられた。それから長い期間を経て、本格的な鉄骨の西瀬橋が完成したのであった。西瀬橋の川北には商店街があり活気があったが、橋が流されてから、寂しくなった。川北、川南からの自動車の行き来がなくなったからである。

## 水害の記憶

我が家の家は、自動車・建設機械の修理であったのだが、被災した食料品店が自動車の修理代を被災した缶詰で支払ったために、お風呂場には、何年も食べ続けなければならぬほど缶詰の山が、いつまでもあったのである。珍しい見たこともない缶詰もあり、興味津々であった。被災した多くの中小企業は、その後、廃業したところも多くあったのだろうと推察するが、経済的にも精神的にも大変な状況であったと思う。

薩摩瀬の同級生の家は、農業を営んでいたのだが、農作物が全滅となったため、両親が外へ働きに出るようになり、とても貧しい生活を強いられたのだと、大人になっ

てから話してくれた。私の家は、大雨のための床下浸水はいつものことでもあったが、父親の実家のある上青井町は、大水害に見舞われた。一階に寝たきりの祖母がいたのだが、二階に移動したのだと聞いている。親戚や近所の人たちが集まり、おにぎりを大量につくり、もろ蓋に入れて上青井町に運んでいた。

## いかにして防災するのか

平和な日常が、台風・大雨・大雪・水害・地震などの自然災害によって、いつ崩壊するかもしれないというリスクの中で、過去の教訓に学び、いかに防災していくのかについて、日頃から考えておかなければならないだろう。

今回の西日本豪雨の中で、被害の少なかった高知県が注目されている。日頃からの防災意識の高さや、ダム管理も機械に頼らず、人間の手によって調整していたことなどが挙げられている。

私のマンションには井戸水があり、エレベーターの中には、食料とトイレまで用意されている。いつ地震が来て

も対応できるように、日頃から考えておかなければならないようだ。いつか来る地震などの自然災害のために、命

と生活を守るために知恵を出さなければならない。

【かりた・ともこ／人吉市出身、千葉市在住】

# ダムはムダ

尾方憲二



水害の痕跡は今も…  
(人吉市下青井町、撮影：尾方憲二)

まだ小学校に入る前の小さな弟が泣き出した。今までの洪水では泣かなかった弟がである。例年の洪水だと、我が家から一段低い位置にある民家の床下か、せいぜい床上浸水で済んでいた。ところがこの日の水かさとはとまる事を知らず、あつという間に下の民家の屋根まで達してしまった。大人達の不安げな様子が弟に伝わったのかもしれない。泣き止まぬ弟と一緒に妹、私の三人はもう一段高い位置にある奥の従兄弟伯父の家に避難する事になった。

と、よく覚えているのはこら辺までで後は従兄弟伯父の家で水が引くまで過ごした。

結局、我が家の床上まで浸水してしまった。

家族に被害は無かったものの、水が引いてからの後

# 麦島 勝の世界



「雨上がりの国道」 八代市渡町（昭和28年6月25日）撮影／麦島 勝（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）



「洪水を楽しむ」 八代市渡町（昭和25年6月25日）撮影／麦島 勝（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

## 水害のもうひとつの風景

水害は人間の生存、財産を脅かす怖い状況にはほかならない。それを体験した者はその衝撃を心に刻み込み、その恐怖を忘れることはない。体験したことのない者も、テレビなどの映像を通じて、その破壊力に驚き、被災者の状況に心を痛め生活再建に少しでも助力できればと願う、ボランティア活動などに参加したりもする。そして、それらの一連の状況を記録し後世に伝えていく作業は重

要で、これらもつづけていかなければならない。麦島勝さんも水害を記録している。多数の記録が悲惨さに焦点をしばっているなか、麦島さんは別の側面を記録した。水害のあとで遊ぶ子どもたちの姿、被害を受けながらも活力ある人間の姿を写真に撮った。不幸を記録しない、映像として公開しない、という麦島さんのスタンスがそこにあらわれている。紙面の都合もあるので、今回は、代表作2枚も紹介するにとどめる。（春秋）



自宅前で様子を見守る人たち。下の写真は現在の同地（人吉市下青井町、写真提供：尾方憲二氏）



片付けが大変だった。なにせ全てが泥まみれ。床の上の粘土質の泥を洗い流し、伝染病予防の為の薬剤散布。下の段にあったタンスの中の着物を洗濯。大人は大変だったろうとつくづく思う。  
小学生だった私は大した手伝いもやらず見ていただけだった様な気がする。後で聞いた話だが、この時の急な増水は市房ダムの放流が原因だったらしい。

53年後の2018年7月、これよりもっとひどいダム災害が起きた。いつまで経っても馬鹿なことやっている。

【おがた・けんじ／人吉市下青井町】

# 肱川の水害から、球磨川の昔の暮らしとダム問題を考える①

自然観察指導員熊本県連絡会会長 つる 祥子

7月の初旬に西日本を襲った豪雨は、多くの府県に甚大な被害をもたらした。特に、ダム問題に長く関わってきたものとしては、6県8つのダムが洪水調節不能に陥り、但し書き操作に入り、下流に氾濫をもたらし、多くの犠牲者を出したと聞いた時は、球磨川流域の人たちの経験やダムに翻弄された長い時間が、全く意味がなかったように思え、怒りを覚えた。球磨川流域の住民は、過去の経験からダムに問題があるとして、川辺川ダム建設に反対し、荒瀬ダム撤去を実現し、ダムなし治水の道を選んだ。しかし、今回被害を出した他流域の多くの住民が「ダムがあるから大丈夫と思っていた」と答えている。他県ではダム神話が生きていることにも驚いた。

しかし、球磨川流域においても、もうダム反対運動の歴史も知らない、ましてや洪水と共存してきた先人の知

恵も知らない世代も増えてくると思う。また、ダムなし治水で、治水の安全度が高まってきた現在、ダム放流の怖さも知らない世代も増えてくるが、今後の異常降雨で、やはり市房ダムが緊急放流せざるを得ない状況が来ないとは絶対言えない。こういう歴史は、繰り返し繰り返す、次の世代に伝えておく必要を強く感じ、今回の肱川の水害と、球磨川の洪水と水害の歴史を併記しながら、まとめておきたいと思う。

## 肱川の水害

肱川は流路延長103キロメートル。球磨川より10キロメートル程短い。他の河川と大きく違うのは、先に川が出来、その後のゆつくりとした造山運動にもあまり左

右されなかった、全国でも珍しい先行型河川であることだ。そのために、河川勾配はとても緩やかで、所々にある盆地に大きな集落や田畑が形成されていた。河口にもいわゆる扇状地はなく、山に挟まれて川幅は狭い。そのためにとても水はけが悪く、昔から洪水を繰り返して、大きな被害を出してきた。昭和18年の低気圧、昭和20年の枕崎台風により大きな被害を受けたのを機に、

ダムや堤防による治水へと切り替えられている。

しかし、ダム建設後も被害は度々あり、大きな水害も発生している。にも拘わらず、その時にダムによる洪水調整の状況について、あまり調べられていない。住民も、ダムがあるから大丈夫だと、疑うこともしなかったようだ。

しかし、国交省やダム管理者は、他ダムの放流事例から、ダムの過剰放流が下流に何をもたらすかを知っていたはずだ。であれば、例えば、書き操作に入ったとしても、マニュアル通りではなく、下流の水位を確認しつつ、満杯になる前にダムの水位を下げておくなど、被害軽減は出来たはずである。愛媛県肱川の二つのダム、野村ダムと鹿野川ダムの放流について、四国整備局は、「操作には問題なかった」「避難指示は出したが、住民に行動を起こしてもらえなかった」と聞くに堪えない説明をしている。

野村ダムは、下流の野村地区まで、わずか2〜3キロメートル。ダムが放流すると、5分、10分程で到達する距離だ。実際、ダムが6時20分に放流して、6時半ぐらいから急に水高が増したと住民は証言している。

野村ダム管理事務所は、「放流量は流入量と一緒なので、ダムがない時と同じ」と説明しているが、おそらくダムの緊急放流の怖さを知っていたのだろう。午前2時半には、野村町支所長に電話をして「最悪の事態を想定して、対応してほしい」と伝えている。しかし、野村



肱川沿いの西予市野村 (愛媛県)

住民に避難指示が出たのは5時過ぎ。それも、いつもの増水時と変わらぬ伝え方で、ダムが放流するということも伝えていない。もし、電話があった2時半に住民に伝わっていたら、氾濫するまでの4時間、住民は余裕をもって安全に避難することが出来たであろう。

### 昔の球磨川と昭和40年水害（旧八代市）

球磨川本流には、球磨川総合開発の一環として、昭和29年に荒瀬ダム、昭和33年に瀬戸石ダム、昭和35年市房ダムと次々にダムが建設された。また、遥拝堰も昭和40年にそれまでの固定堰から可動堰へと改修された。その前の球磨川はどうであったのだろうか。

流路延長約115キロメートルの球磨川は、九州脊梁の山々を源流とし、急峻な山々を縫うように駆け下りると、広い人吉盆地に入る。そこから方向をゆっくり変え、再び球磨村から坂本町までのV字谷のような深い山々を蛇行しながら、広い八代平野に出るまで、今よりずっと狭い川幅を流れ、日本三大急流の名にふさわしい

様相を持つ川であった。

昔はどの川もそうであったように堤防はないので、水を得やすくも、洪水で流されない安全な場所を選んで住居を構え、村や町が形成されていたのであろう。



① 昔の萩原堤防

写真①は、八代市の昔の萩原堤防である。川幅は、今の3分の1ぐらいしかない。石を投げると対岸に届いたという知人もいる。左岸には広い河川敷が広がり、家も見える。安全であったので、次第に人が住みつき、渡町という町が形成された。旧萩原橋は今の萩原橋より下流にあり、渡町の中を通る道が旧3号線である。大雨が降ると道路が浸かり、バスも不通になるので、私も水の中を歩いた経験

がある。洪水が来ることはあり、床下浸水はあっても家が流されることもなかった。しかし、ダム建設後の昭和40年7月3日の大水害の時は、多くの家が水没し、中洲に取り残される人もいた。それまでと違って急激に水嵩が増えたという。

写真②は、旧萩原橋の下流の右岸にあった豊国旅館である。石積みの上に建てられたこの旅館は、堤外（堤防より川側）に作られた建築であったが、ここで長年洪水



② 豊国旅館



に遭うことなく旅館を営んできた。これも昭和40年水害の時に流された。土台の石積みが流されたために旅館も倒壊したのであるが、水が堤防を越えることはなかった。川辺川ダム建設を巡る住民討論集会の中で、時の塚原所長がこの旅館の写真を見せ、「これが安全と言えますか？ 萩原堤防は日本一危ない堤防だ」と怒鳴るようにいったのを覚えているが、ダムで急激な上昇がなければ、この写真のように古くなるまで経営出来ていた場所なのだ。大水時に水が堤防すれすれまで来ても、川の近くにより手足を洗っていたと知人が言っていたが、球磨川は暴れ川ではなかった。「水害」という言葉も「暴れ川球磨川」という言葉も、ダム建設後に生まれた言葉である。また、この頃の萩原堤防の右岸は、40年水害を機に改修されるまで、今より1メートルも低かったが、1755年の瀬戸石崩れ以来、決壊も越流もしたことはない。そして、左岸の堤防は更に3メートルも低く造られていた。江戸時代、球磨川の治水工事を行った加藤正方が、球磨川が出水する場合を考えて、八代城下を守るために、人家の少ない高田地区に溢れるようにした

と聞く。私の住む場所であるが、90歳過ぎのおばあちゃんに聞いても、水が来たことは一度もなかった。川辺川ダムがないと、80年に一度は氾濫して、5メートルも浸かることになっている。

### 昔の球磨川と昭和40年水害（旧坂本村）

遙拝堰から上流に位置する旧坂本村・球磨村は球磨川の狭窄部ということもあって、洪水時には度々、場所によっては毎年、冠水している。しかし、舟運で栄えた村々は生活や利便性、川の恵みを得やすい川沿いに家を建てて暮らしてきた。気象情報もない昔、雨の降り方や雲の動き、川の水の増え方で、今日はどこまで水がくるなあと判断しては、必要な準備を行って、対応してきた。

流域の水害や洪水時の聞き取りをしてきたが、流域の人たちの話はみな共通している。床上まで来ると思うと、丈夫に造った水に強い床板の上にテーブルや畳、家財道具を載せ、対応した。ほぼ予想したところまで水位は来たというから驚きである。水が引けば、畳を干して、障

子を張り替えれば1年に一度の大掃除と一緒に、家がピカピカになったという。「楽しい洪水だった」というのには、更に驚いた。洪水で岸辺に寄ってくる魚を、どこの家にもあった大網で掬う「濁り掬い」が楽しみで、大急ぎで洪水の準備を済ませたという。

今回、肱川で水害に遭った知人にも、昔の洪水はどうでしたかと電話で聞くと、やはり「楽しい思い出しかない」という返事が返ってきた。特に、魚掬いが楽しかったのも同様である。もしかしたら、昔から水害に度々見舞われたという肱川流域も、本当は洪水の常習地であったという意味かもしれないと思った。これについては、機会を見つけて調べてみたいと思う。

写真③は、鎌瀬橋の上流右岸にある中津道集落で、昭和40年7月3日の水害の数日後に撮られたものである。一番左の家が知人Hさんの家であるが、明治時代に、ここは安全だからこの場所に建てられ、この時築80年であった。やはり、これも時折の浸水はあったが、床下浸水で済んでいた。それでも、浸水がなくなると説明さ

れ、荒瀬ダム建設には反対しなかった。それが40年7月3日はあつというまで屋根まで浸かる大水害となった。

事業者は想定外の豪雨だと説明したが納得がいかず、抗議をする中で、荒瀬ダムの計画洪水水位は1階の軒下のところだと知った。荒瀬ダムが満杯になると、家は浸

水するというのが前提であったこと、且つ、建設前に一度もそういう説明はなかったことに地区の人の怒りが収まらなかったのもうなずける。

この場所は、

③ 中津道集落  
市ノ俣川との合流点でもあり、市ノ俣川

の傍らにお茶工場とその一段低くなった川沿いに数件の家があった。私の知人のNさんもここに住んでいた。ずっとここで暮らしてきて、40年水害時は新築後3年ぐらいであった。あつという間に水位が上がり、家は全壊した。家の借金があるので、もう新築の余裕はなく、川の上流にあった炭焼き小屋を借りて住んだ。お茶碗やテーブルなど、みんなが寄せ集めてくれたが、それからの暮らしは、失った家の借金を返すための生活だった。働きすぎでご主人が病気になるやうになると、Nさんは一人で働いて、借家住まいをしながら子供を育てた。荒瀬ダム撤去の話が持ち上が頃まで、何度も企業局に足を運び補償を求めたが、遂に諦め、都会に住む子供さんのところを身を寄せられた。私がダム反対運動をしているというので、1週間に一度は私のところに来て、その悔しさを話されたが、話を聞いてあげることしかできなかった。

（続く）

【霧・しよつこ／八代市】

※坂本の水害については、本誌18・19・21号を参照のこと



# 雨と共に学ぶ

椎葉直美

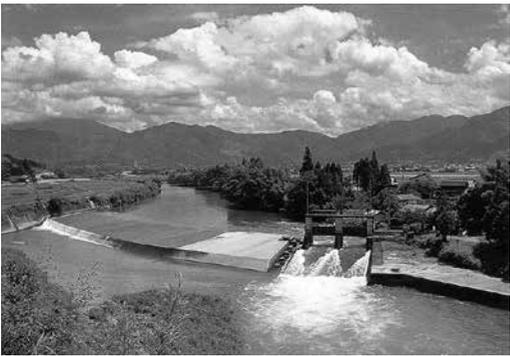
今回の西日本豪雨で被害に遭われた方々へ、心よりお見舞い申し上げます。

今年は5月28日頃といつもより早めの梅雨入りでした。しばらくは空梅雨で、田植えの準備への影響が心配されました。毎年田んぼの水張りが集中する頃は、用水路に水が流れて来ないから早よ流してくれ、代あけができないと、勤務する土地改良区事務所へ電話が掛かっています。怒鳴り口調で言うてくる人の対応は速やかに男性職員へ。男性職員は電話を切る、すぐさま水路の状況を見に行き、樋門や堰板の調整をし、流れの妨げになっているゴミや泥を汗まみれになりながら取り除く。私は事務所で雨雲の訪れを天に祈る。

今年もそんな日が続く梅雨も半ばの6月19日から20日にかけて、半端ない量の雨で状況は一転。多良木町久米では、6月20日の朝、1時間に50ミリ以上の記録的な大雨が降り、久

その時の恐怖心を私は記憶していない。その日の鹿児島市内の降雨量は259ミリ。

次の日には水が引いたので私たちは帰宅することができた。迎えに来てくれた父の車に飛び乗り、甲突川と並行に走る国道3号線を通って帰った。甲突川の氾濫で道路や建物は大量の泥で覆われ、車は横転。これまで灰まみれの世界は見ることもあつても、まさか一晩で茶色く濁った泥だらけの世界になろうとは、目を疑った。後から知った事だが、国道3号



洪水でないときには水は宝 ©水土里ネット百太郎溝

線上で止まったバスの中で一夜を明かした人達もいた。生きた心地がしなかっただろう。自宅は高台にあるので、幸いにして被害はなかった。「家は大雨が降っても、台風が来てもなーんともなかよ。」という母の笑顔と、帰る家がある時あつて本当に良かった。

米の山々から流れてくる柳橋川の濁流は、何もかも飲み込んでしまい、そうなほどに大きなうねりを上げ、流れる音は唸り声のようにも聞こえる。私たちが管理している百太郎溝は、あさぎり町岡原地区や上地区で水路と道路の堺が分からなくなるほど溢れ出し、周囲の稲や葉たばこが育つ田んぼの中、住宅の敷地の中へ流れ込んだ。一日、いや一晩で状況が様変わりしてしまつたら雨は恐ろしい。

私は高校卒業後、地元鹿児島市内のガス会社に就職し、その4か月後の平成5年8月6日、勤務中に「8・6水害」に遭う。夕方帰宅する頃、会社の前のナポリ通り（鹿児島中央駅から東へ延びる大通り）はナポリ川と化し、地下、1階は浸水。早めの帰宅を促されたわけではなかったため、社員のほとんどは帰宅できずに2階、3階へ避難した。夜になると停電となり、非常灯やろうそくの灯りの中で、ガス会社だけにガス釜でご飯を炊き、女性社員でおにぎりを握った。夜中には大人の胸の位置まで水位があつたと思う。水深はあるが流れはさほどなかったのだらうか水の中を歩いているのか泳いでいるのか移動している人達を見た。そういう光景を目の前にしても、若さ故なのか、大勢の人達と一緒に居たからなのか、

水害の経験をしているので、大雨が予測される日は、帰宅できない事を想定して、最小限の日用品と着替えを車に乗せて出勤する。経験がなくても、万が一の事を誰もが想定してほしい。と言いながら、一番身近にいる高校生の息子は、あの大雨が降り続く7月8日に鹿児島市内へ映画を観に行くのだと簡単に言う。高速バスのチケットも映画のチケットも購入したから、何が何でも行くと言って聞かない。当日バスは運休。息子はやつと諦めがつき、私は胸をなでおろす。若い頃は経験が浅い事もあつて危険を判断する力が乏しい。私も若気の至りで台風が来ると分かっている、山中へキャンプに行ってみたり、佐多岬へドライブへ行ってみたり。そして引き返すはめに。

危険が目前に迫っているのに、突拍子もない行動を取る人がいたら引き止めないといけない。増水した川や水路に近づく人、写真や動画を撮る人。もしもの事を考えないのかな。今立っている橋が流されたらとか、河岸が崩れたらと考えるとゾッとす。

私は自分が住む町のホームページを開き、「防災」と検索した。「地域防災計画書」という物が出てきて指定避難所や、球磨川水系洪水浸水想定区域図、球磨川洪水時の危険箇所

(堤防が壊れる恐れのある個所や堤防の高さに余裕がない個所)が載っている。自宅付近も危険区域である事を今頃になって確認する。指定避難所は必ずしも安全な場所であるとは限らないし、危険個所以外にも危険は潜んでいる。幾つかの避難先、避難ルートを決めて、色々なパターンを想定しイメトレをしておくこと。自分の命は自分で守る「自助」の意識を個々

## カブトムシを持って逃げた

### 昭和57年の夏

淋 俊二

私が住む球磨村一勝地<sup>いちせいち</sup>淋地区は、日本三大急流球磨川が流れ、県道304号、J R肥薩線が通る小さな集落だ。毎年、梅雨や台風時期になると、その球磨川が増水し、県道が冠水する。小・中学時代、道路が冠水した際には、豪雨で連休した肥薩線を、先生の先導で帰宅するのが常だった。今考ええると恐ろしい光景である。

幾度の水害の中で私が忘れられないのが、最も水位が上がっ

が高めておくことで全体の被害が少なくなれば、その分お年寄りや身体の不自由な人、小さな子供たちへの支援が手厚くできると思う。

球磨川流域で生活しているからこそ学べる事、これも球磨川の恩恵かな。

【しばい・なおみ／鹿児島市出身、あさぎり町在住】

た昭和57年7月の水害である。奇しくも同じ九州で被害がひどかった長崎水害と同じ日の出来事だった。当時、小学四年生だった私の夏休みが始まった直後の事だ。

梅雨明け間近で、数日間雨が降り続き、もちろん球磨川の水位も増水したところに、豪雨がきたから、いつもより激しく増水し、県道は冠水。さらに貯水できなくなった40km上流の市房ダムの放水と重なり、尋常ではない増水だったのを小学生だった私でも記憶している。

家族、親戚の中で、家財道具を家屋内に積み上げた。もちろん小学生だった私も手伝った。父が大事な物を上に積み上げると言ったので、私は教科書よりもランドセルよりも大切にしていたカブトムシの入った虫かごを上へ上げたのを思い出

す。いま思えば笑い話である。

そうこうするうちに、球磨川から12メートルくらいのところにある我が家の庭に、茶色く濁った臭い水が押し寄せて来た。このまま家屋内にいるのは危ないと判断した父が、我が家より2メートルは高い肥薩線へ避難するように、私たち兄妹と祖母に言った。父は後に「もう家は流される」と思ったらしい。



昭和57年の水害時。MAX時より20～30cmは水が引いている

避難する時は、すでに玄關に濁った臭い水が入り込んでいた。我が家から肥薩線までは、30メートル。膝まで浸かりながら避難した。幼心に、避難しながら我が家は流されてしまうと悲しい気持ちになったのを憶えている。

諦めた大人たちが我が家の縁側で、焼酎を飲みながら一服している写真が我が家にはある。記念、いや記録写真だ。

しばらくしたら幸いにも、球磨川の水が引き始めた。地区の被害としては1軒が流され、4軒が床下浸水。完全に安心できたのは翌日、県道から見た球磨川を見た時であった。

中学生になった頃にも、水害は毎年のようにあった。その年齢になって、分かってきたことがある。水害とダムの関係だ。

基本的に、農業用水を目的とするダム、貯水が目的なので梅雨時期でもある程度の貯水を強いられる。予測できない豪雨で、ダムの水位は上がり、放流を余儀なくされて、下流の流域がどうあれ、ダムは放水する。このダムの水と降り続く豪雨で、下流域は一気に増水する。

上流にダムがある地域は水害ではなく、人災に遭っているのと同じだ。それなのに、上流にダムを作る計画があったなんて、とんでもない話だと思っ。

世の中、色々な絡みがあつて、推進することがあるのだから、水害を体験した者にしか分からないこともある。

以上、私の小学四年生の時の水害体験が、何かの参考になればと思っペンを取った。

【そそぎ・しゅんじ／球磨村一勝地】

# 人吉藩の大洪水①

## 一、正徳二年（一七二二）球磨川大洪水

尾方保之

はじめに

熊日新聞七月二十日の報道によると、七月六日以後の「西日本豪雨」による死者は二三人、住宅全壊二千八四七棟、三万四千棟の床上、床下浸水で、避難者が四千五百人以上とつう。

昨年の九州北部豪雨と共に、予想をはるかに超える集中豪雨と、その被害の大きさである。その後は、猛暑による熱中症で毎日死者が続いている。

幸い人吉球磨においては、大きな被害を受けなかったが、他人ごととして傍観してはられない。いつ台風や集中豪雨による山崩れや球磨川の大洪水が起こり、大被害を受けるかもしれないのである。

人吉藩の歴史において、これほどの集中豪雨による大被害の記録はないようだが、台風と大雨洪水による球磨川の氾濫

氾濫が起こった。この球磨川大洪水については、種元勝弘氏も

「人吉文化50〜51号」に紹介されている。

この大洪水について、人吉藩の歴史書『嗣誠獨集覽』(相良村誌)は、次のように具体的に述べている。

「石洪水之事、七月六日昼時分ヨリ雨降り出シ、翌七日大雨夜中猶不<sub>レ</sub>止、八日夜明迄篠ヲツクニ不<sub>レ</sub>異…」と七月六日昼頃より降り出した雨は、翌七日中降り続き、夜になつても降り止まず、八日の夜明けまで篠を突くがごとく降り続いた。そのため八日の五ツ半(午前九時)頃にはピーク(満水)となった。その結果、

「水之手角石之処ニ而地水ヨリ一丈五尺二寸余、岩下御門前石段下ヨリ四段目迄水付、同所椽木平地ヨリ四尺水上ル、無熱(胸)川御門柱二尺一寸之処迄水上リ、御門之内北通代物蔵前通水付、馬責馬場高崎藤五門ヨリ西四間六尺之処迄水上ル、仍(ヨツテ)御門内船ニ而通路有<sub>レ</sub>之候…。」

水の手門の角石のところで、球磨川の水位が一丈五尺二寸(四・六m)上がり、岩下門の椽木の所で四尺(一・二m)も水が上がった。大手門(胸川御門)の門柱も二尺一寸(六三cm)ほど水が上がったので、城内の代物蔵や馬責馬場まで浸水し、舟で通行したという。城内は完全に浸水し、武家屋敷も大き

の記録はたくさん残されている。

人吉球磨における自然災害について考えてみる一つの資料として、まず「正徳二(一七二二)年の大雨洪水」について紹介したいと思う。

### 七月八日、球磨川氾濫

#### ——城内舟で通行、青井楼門浸水

江戸時代を通して、台風・大雨洪水などの災害が絶えることはなかったが、元禄時代から宝永・正徳年間に大きな災害が発生するようになり、さらに享保時代は大飢饉が起こるようになった。

宝永四年(一七〇七)の大地震から五年後の正徳二(一七二二)年七月七日・八日、大雨洪水による球磨川の大

な被害を受けたようである。

『嗣誠獨集覽』はさらに球磨川の大洪水による大橋などの流失と青井神社の楼門の浸水についても次のように述べている。

「…小俣之方橋中河原ヨリ二間目、三間目合本間八間程落流、山田川橋皆落、青井鳥居之内迄水上リ、桜馬場舟ニ而通路、遙<sub>ハルカ</sub>ニ川面ヲ見渡ニ大海ニ不<sub>レ</sub>異、貴賤希有之思イヲ成スト云々。」

大橋は小俣橋の方が八間(二四・四m)ほど流失し、山田川の橋もすべて流失した。洪水は人吉町に氾濫し、青井神社の鳥居の内まで水が上がった。そのため桜馬場は舟で通行したという。球磨川の川面を見渡すと、大海を見るようであったという。

『南藤曼綿録』(梅山無二軒著)によると、青井社の浸水について次のように記録している。

「同年七月七日大雨洪水、御城下大橋小俣ノ方三間落、シモ八青井宮楼門二間へ、凡其前寛文九年己酉八月十一日ノ洪水二尺程水増候由」と。

四十三年前の寛文九(一六六九)年の大洪水では、青井社の楼門が三尺余間え、大橋が十間余り流失したと『南藤曼

綿録』に記録されている。そのため今回は楼門が四尺（一・二m）余り浸水したことになる。楼門が一・二mも浸水したとすれば、人吉町の浸水はもっとひどいものであったに違いない。

### 大洪水の損亡破損の届

七月八日の大洪水による作物の損亡高と家屋などの損害届を八月十二日、藩主頼福公は、幕府御用番大久保加賀守へ提出した。

その内容は『嗣誠獨集覽』によれば次のようになっていた。

私領肥後国球麻七月八日、就洪水損亡破損覚

一、水田六十九町四反二畝十二歩

内、一、四十五町 永荒

一、二十四町四反二畝十二歩 当荒

此高千五百六十二石八斗一升五合

一、畠十四町五反二畝十八歩

内、一、十町 永荒

一、四町五反二畝十八歩 当荒

一、井関五千七十三間 流失

一、川除五千五百三十間 流失

一、土手二千十八間切

一、樋五ヶ所潰

一、橋 大小十五箇所 流失

一、往還道筋八百間崩

一、流家 十軒

一、流死 一人

一、城内並侍屋敷別状無御座候

一、牛馬怪我無御座候

右之通御座候、此外田畠水入之所損亡、委細二八相知レ不申候由申越候 己上

八月十二日 相良耆岐守

この大雨洪水の被害届によれば、水田六十九町余の被害の中で、四十五町が「永荒」、二十四町が「当荒」となっている。「永荒」とは復旧不可能な被害地であり、「当荒」とは一年後は復旧可能な被害地のことで、それらの損亡高は千五百六十石余となっている。畠の被害は十四町で済んだ。しかし、井関の流失が五千間（約九千m）を超え、川除（堤防）の流失が五千五百間（約二万m）を超えており、橋の流失も十五ヶ

所となっていた。被害は大きく、その復旧には多額の経費と労力を必要としたと思われる。

### 一ヶ月後に台風襲来

この大水害の一ヶ月後の八月九日午後四時（申上刻）から夜九時（亥下刻）に台風が襲来し、大きな被害を残した。藩は九月十八日、被害届を幕府の御書付御用番井上河内守へ提出した。

『嗣誠獨集覽』によれば次のようであった。

私城下肥後国球麻八月九日申上刻ヨリ亥下刻迄大風雨損

亡之覚

一、田畠損亡高千五百石余当荒

一、城内別条無御座候

一、侍屋敷潰家八軒

一、町家潰家十軒

一、民家潰家八百八十五軒

一、倒木千二百六十八本

一、死人女二人

一、牛馬怪我無御座候

右之通御座候 己上

九月十八日 相良志摩守

この被害届によれば、侍屋敷や町屋の被害は少なかったが、民家の倒壊（潰家）が九百軒ほどあり、死者も二人いた。強い台風で、大きな被害を残したようである。田畠の損亡高も千五百石余となっている。前月の水害と合わせて三千石余となる。人吉藩の当時の生産高（総高）は五万三千石ほどで、その年貢米（約四割六分）は二万四千石ほどであった。損亡高は、全生産額の約六%に当たるようである。

台風や大雨洪水の被害は翌年の正徳三年（一七二二）、さらに四年にも続き、損亡高は三年が二千三百石余、四年が四千三百石余となっていた。そのため正徳五年（一七二五）には、七百五十人ほどの餓人が出たため、藩は一人一合の餓米を出したと記録している。

【おがた・やすゆき／求麻郷土研究会、球磨郡錦町】

# 倉敷便り

20

絵と文／原田 正史

## 津軽紀行(二)

西福寺を辞した私たちは、タクシーで弘前市の相良町を一周することになりました。距離は1km程度です。この町のどこかに清兵衛殿の屋敷があった筈です。生憎、弘前市教育委員会は休日のため閉まっております、所在地を確認することが出来ませんでした。更に持参した拙著を贈呈することも出来ず、清兵衛に関する数多くの驚くべき事実を伝達出来ませんでした。

流罪当時には、相良町という町

名を現在も残している程ですから、大変な有名人だったに違いない清兵衛ですが、現在の弘前では知っている人は全くいないと言えるでしょう。弘前市の説明書では、流罪の原因を天草の乱に際して、清兵衛が出兵を渋ったからだときられています。これでは津軽のような遠国への流罪にはならないでしょう。この説明書を見ても、最近の弘前市の清兵衛殿に対する関心の低さが理解できます。

現在の相良町には、弘前大学の医学部や、その付属病院などの公共施設が存在します。コミュニケー

ションセンターそばにある佐々木邸には、清兵衛ゆかりの梅の古木が存在します。この梅の木は、清兵衛が存命中に津軽の殿様から拝領した梅の盆栽を、その後地植えしたものであるとされ、幹周り3〜4mほどもあるうかと思われる大きさに圧倒されると共に、400年にせまる時の流れが、しみじみと感じ取られました。幹からは大きな枝が何本も伸び出し、緑色に輝く若葉を全面につけていました。開花の時に来訪できたなら、さぞかし見事な景観に接することが出来るでしょう。

説明板には、梅(八重紅梅)指定第3号と記されていました。したがって弘前市には、この梅の木に匹敵する古木が、少なくとも2本は存在することになります。その二つ

は間違いなく弘前城天守閣そばの桜であり、これが第一号と思われるます。第二号は、これも弘前城内に数多く群生している赤松の巨木の中で、最大のものである可能性が高いと考えられます。

弘前の市街地の印象は一般的な市

街地とは異なり、道路が広く、建物と建物との間にゆとりがあることです。最初に見た時には、土地が余っているだろうかとも思ったのですが、これには北国特有の事情があったのです。降る雪は半端ではなく、そのまま放置しておく家が潰れる

のです。降雪の最盛期になると雪おろしに一日、5〜6時間の労働が必要とのことであり、若い時には別段気にもしなかったが、50を過ぎるとさすがに苦しくなるとタクシーの運転手さんが話してくれました。

市街地を離れ郊外に出ると、今まで見たことのない藁葺根の家が、新しい家の間に点々として現れてきます。その殆どが廃屋ですが、一部は現在も使われていて、津軽の住居事情の一端が理解されます。

佐々木邸を後にした私たちは、北国の珍味を求めて、宵闇せまる弘前の街に出ました。最初の店では、ホヤとホタテの刺身を注文しました。新鮮そのものといえる刺身は、甘くて舌触り豊かなものでした。最後に訪れた店では、テレビで見知っ



弘前市にある佐々木邸の梅の古木  
(2018.7.20, 原田)

ていた東北特産の根曲がり筍<sup>タケノコ</sup>を食  
することが出来ました。鉛筆ほどの  
大きさで、炭火で焼かれた細長い筍  
はまだ温かく、通常の筍では味わえ  
ぬ野趣にあふれるものでした。また  
名古屋コーチン、鹿児島<sup>シヤモ</sup>と  
共に日本三大地鳥と称される地内  
鳥の手羽先の唐揚げを注文しまし  
た。久し振りに味わう地鳥の食感  
は、硬いながらも歯切れ良く、満  
足できるものでした。最後は青森名  
産のリンゴジュースです。

店には大量のリンゴが冷凍保存さ  
れており、種類も豊富で、甘みが  
強いもの、少し酸味を含むものなど  
変化に富んだリンゴジュースが楽し  
めます。リンゴの木については、自  
然のままではどのような樹形になる  
かをスイスの農園で見ることがあり

ます。ここ青森では、どの家でも少  
なくとも一本、通常二、三本のリン  
ゴの木が植えられていました。昔の  
日本の農村で、殆どの家に柿の木が  
あったのと同じ風景です。自然のま  
まのリンゴの木は、弘前で見られる  
ように、徹底的に剪定されていて、  
幹は短くて太く、その先端から伸  
び出た枝は、水平方向に円状に広  
げられていて、低い脚立でも作業が  
出来るようになっており、労働の省  
力化に役立っています。

津軽平野の山地に接する部分は、  
海岸方向に向かって緩やかに傾斜す  
る台地状の地形となっており、集落  
が点在する畑地となっています。車  
窓には野菜畑などの間に広大なリ  
ンゴ畑が次々と現れては消え去り、  
特有の景観を出現させています。よ

く見るとリンゴの木には小さな実が  
一面に付いていました。低い崖となっ  
ている台地末端に達すると、ここか  
らは海岸に向かって水平方向に広が  
る水田地帯となります。天にまで届  
くかと思われる、満々と水を湛<sup>た</sup>え  
る早苗田の果てしない広がりを見  
ると、この地こそ、まさに穀倉地帯そ  
のものだと言えそうです。

相良なる町名残す弘前に  
我は来れり殿<sup>ど</sup>を慕いて

【はらだ・まさふみ／元人吉市  
文化財保護委員、倉敷市】

## 鶴<sup>せき</sup>鴿<sup>れい</sup>短歌会

### 七月詠草

降りつづく雨垂の音心地よくリズム刻みて睡魔を誘ふ  
逝きつてなお高座賑わす歌丸は笑いを誘ひ囃しつづけて

守永 和久

災害の続く最中に不謹慎カジノ法案論外のそと  
炎天下矢黒神社の夏祈禱災い鎮めと氏子等祈る

河内 徹夫

八十歳<sup>はちじゆう</sup>を越えて故郷の同期会互いの命喜び合ひたし  
列をなし裸でプールへ向かふ子等古今変はず嬰兒は無垢

中村美喜子

郊外の隠居らしきたたずまいされど周りは雑草ばかり  
平穩の纏めに近き吾なれど不吉な夢に深夜目覚めて

西 武喜

城内の堀の廻りを散歩する蓮の大輪仏の顔に  
リハビリの亡夫<sup>つ</sup>と歩いた道に出る「転ぶなよ」との夫の声聞く

釜田 操

災害の後片付けの人々の汗だく姿に唯ただ感謝  
少しでも手助けしたいと思っけど足手まといに思いとどまる

中原 康子

魔よけにと真つ赤な鬼灯飾つても我が家の魔もの退散せぬか  
家中の温度の上がる昼時はこんこんと湧く清水がほしい

三原 光代

五月雨にアジサイの花七変化わが逝く時は紫色か  
五月雨にアジサイの花咲き乱れ時季の盛りを吾と重ねて

橋詰 了一

ふと見せる消え入りそうな表情に別れがこぬか不安がよぎる  
雨に濡れ鎖繋がるる瘦せ犬をレストランにて窓越しに見る

堀田 英雄

# くまがわすじの考古地誌

(21)

## 球磨川筋の弥生時代<sup>②</sup>

八洲開発株式会社 木崎文化財研究室長 木崎康弘

(NO.182)

### 「免田式」をしよう！<sup>⑦</sup>

### 夏女遺跡、土器の話<sup>②</sup>

園村辰実の仮説の一つ、「六八号住居跡↓五七号住居跡」は、土器の観察結果からも見事に的中した。

六八号竪穴式住居跡（竪穴式を省略して「住居跡」と表記）は、弥生時代後期前半、西暦二〇〇年代の二世紀、今からおよそ一九〇〇年前の家の跡だった。今の熊本、この前まで「肥後」と呼ばれた地域（以下、この地域のことを「肥後」域と呼ぶ）では、例えば菊池川流域の西久保式土器のように、胴の上部が強く張り出した形の台付き甕形土器が共通して使われていたが、この住居跡の土

器も同じ特徴だった。その中に、球磨では、胴部がソロバン玉のように強く折れ曲がり、文様もシャープな重弧文土器が現れた。ところが、菊池川流域では、そんな動きは微塵も起きなかった。その出現が「肥後」域の中の他の地域でも起きたのか、球磨だけで起きたのかは、まだまだ謎であるが、私は、こうした事実を踏まえ、また、「免田式を使つてくださ」と呼びかけた高田素次の心中（木崎二〇一七）をも察し、古い様相を示す重弧文土器を含めた六八号住居跡で見つかった土器一切を「免田式土

器」として再評価し、免田Ⅰ式と呼んだのだった（木崎一九九六）。

続く五七号住居跡は、後期後半、西暦二〇〇年代の前半の三世紀前半、今からおよそ一八〇〇年前頃の家跡だった。その頃の「肥後」域には、例えば、菊池川流域の野部田式土器のように、胴部の張りが中位にあるラグビーボールのような胴を持つた台付き甕形土器が使われていた。また、胴部の強い折れに代わって、折れの具合が緩い胴部に、重弧文土器は変化していた。その分布域は、白川流域以南の「肥後」域が中心。この重弧文土器を含めた五七号住居跡で見つかった土器一切を免田Ⅱ式土器と呼んだ（木崎一九九六）。

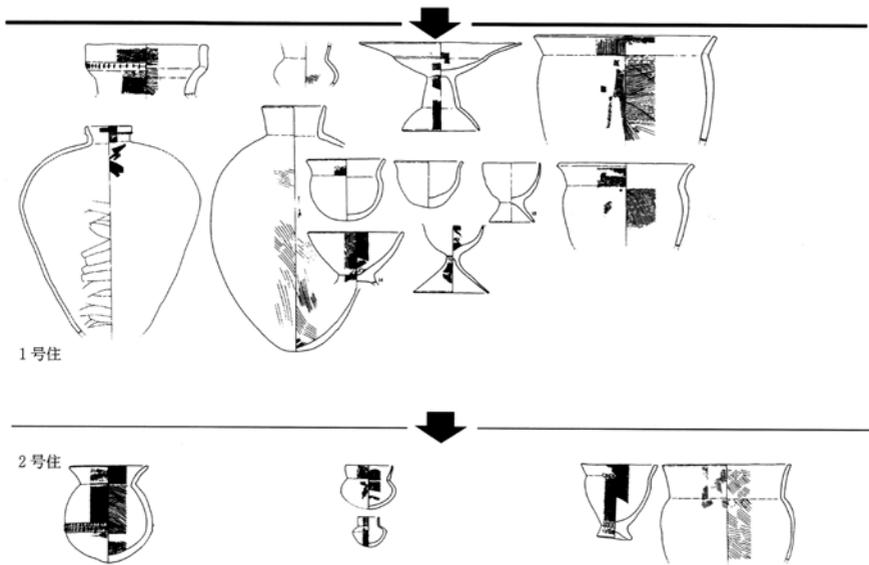
このように、夏女遺跡の発掘は、免田式土器を再評価する機会となったと同時に、六八号住居跡から五七

号住居跡へと重弧文土器が型式（様式）変化したことを教えてくれた機会でもあった。

ところで、もう一つ、重要だったのは、園村が一番新しいと仮説を立てたⅡ類の住居跡、一号住居跡と二号住居跡から重弧文土器が見つかったいないことだった。また、同じⅡ類の四一号住居跡、Ⅰa類の三号や五号、六号、一二号、二九号の住居跡から見つかっていない。ところが、夏女遺跡で見つかった重弧文土器は、その中でもほとんどが古手に属する文様であり、プロポーションでもあった。ということとは、Ⅰb類やⅠc類の住居の時期には重弧文土器がムラの中にあり、Ⅰa類やⅡ類の住居の時期にはムラの中から消え去つたのだろうか。そこで、それをさらに詰めるために、一号住居跡と二号住居跡の土

器を見てみることにして、いつの時期に消えたものなのかのヒントを探ってみることにした。

一号住居跡の出土土器には、壺形、鉢形、高杯形、甕形などがあつた。壺形土器には、口縁に段のある所謂複合口縁を持つ大型のものと、口縁までスッと延びただけの素口縁で卵形の胴部と丸底のもの、そして小型のものがあった。内面には、ヘラ削りの痕が観察できる土器もあつた。鉢には、脚が付かないものと付くものがあり、その口縁形状では、くの字形の屈曲口縁と真つ直ぐのびた口縁があつた。それぞれの組み合わせで鉢形土器を見ると、屈曲口縁で丸底のもの、直口縁で脚が付くもの、屈曲口縁で脚が付くものということになる。高杯形土器の坏部は、丸みを持つ下半部、強くしゃくれた上平部のポロポー



図② 一号と二号の竪穴式住居跡出土の土器

整が、二号住居跡でより明瞭になったことを示す現象であろうと推定される。このことから、二号住居跡は、一号住居跡よりも新しい時期と考えられたのだった(木崎一九九七)。

かくして、夏女遺跡の住居跡は、弥生時代後期の「六八号住居跡」から古墳時代の「二号住居跡」(図②)へと移り変わっていったものと推定できる(木崎一九九七)。ということは、重弧文土器は古墳時代になってムラの中から姿を消したということ

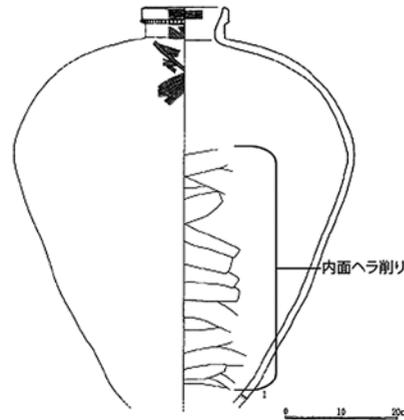
シヨンだった。また脚部は、やや内反り気味に丸みを持つ脚柱と、お碗を伏せたような脚裾が特徴だ。甕形土器には、大型品と小型品があった。大型品の特徴は、くの字形にくびれた頸部から口縁部方向に掻き上げられた縦方向のハケ調整だった。その結果、口頸部と胴部の境は強く屈曲して明瞭となった。胴部最大径は免田I式土器のように頸部のすぐ下に位置することになり、先祖返りによるでもあった。脚台は低い。

二号出土土器には、壺形土器、高杯形土器、甕形土器などがあった。壺形土器には、素口縁、卵形の胴部、そして丸底で、胴部に二条の刻み目突帯が貼り付けられていた。また、口縁形状は不明であるが、丸底の壺や、小型で丸底の壺もあった。高杯形土器は、やや内反り気味に丸みを持つ

つ脚柱部のみが出土していて、一括性には疑問があった。甕形土器には、大型品と小型品があった。大型品は、口頸部の縦方向のハケ調整が特徴的で、一号住居跡のものと同じだった。ただし、口頸部と胴部の境はさらに強く屈曲して明瞭となり、しかも一号住居跡例と比較すれば、より長い口頸部だった。また、胴部の張り出しも、さらに強いものだった。

なお、夏女遺跡では、他に六号住居跡出土土器がこの住居跡の出土土器によく似ていた。

さて、これらの土器だったが、まず、注目すべきは、一号住居跡で見つかった壺形土器に内面に残ったヘラ削りの痕跡だ(図①)。この痕跡は、三、四世紀に現れる古墳時代の素焼きの土器、土師器の内面を整える時に付いた痕と同じもので、弥



図① 内面へら削りのある壺形土器

生時代に見られない特徴だった。つまり、園村の見立て通り、一号住居跡は、五七号住居跡よりも新しく、しかも古墳時代だったことの証拠でもあった。また、二号住居跡の頸部と胴部の境は、一号住居跡例よりも明瞭で、また口頸部もよく発達し、外反の程度が強く、長く延びていた。これは、古墳時代の南九州の甕形土器に現れた口頸部の縦方向のハケ調

か。興味は尽きないが、そのことへの探求は後に回して、もう少し夏女遺跡の実像に迫ってみよう。

(つづく)

【引用参考文献】

- ・木崎康弘 一九九六 「V章総括四 弥生時代後期土器群の編年学的研究」『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会
- ・木崎康弘 一九九七 「第IV章総括 三球磨・人吉地方における古墳時代土器器編年」『堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡』熊本県教育委員会
- ・木崎康弘 二〇一七 「くまがわすじの考古地誌一五「免田式」をとおう① 話題騒然、夏女遺跡の発掘」『くまがわ春秋』第二一号 人吉中央出版社
- ・園村辰実 一九九三 「第IV章まとめ 第一節 竪穴式住居跡について」『夏女遺跡』熊本県教育委員会

# 天草の「五足の靴」

―「パアテルさん」と「茂助」は何処に居る④

富永和信

神父の世話話には信者家の若者、つまり堀口静雄さんの兄や年上の若者たちが七、八人できていた。しかし大戦末期には若者不在となり、姉のトミさんと彼と二人で世話をした。

神父は気が短いところがあつたが、実に慈悲深くやさしい人で、静雄さんはチビチビと可愛がつてもらつた。近所の子どもたちも一様に可愛がり、日曜学校を開いて面倒を見てくれた。日常の生活は質素そのもので、食事も貧しかったが、田舎カレーご飯が好きだつた。魚はイワシは苦手だ

あつたが、めつたに手に入らないブリ料理には目がなかつたという。

私が最も気にしていた『五足の靴』の文中の神父の「茂助や善か水汲んで来なしゃれ」と言われた飯炊き男茂助について聞くと静雄さんは、「歴代の世話人の中に『茂助』という人物は居なかつたと思う」と言下に否定された。

神父の世話をした歴代の若者は野端去、森口茂吉、竹森織吉、堀口為義、堀口弥四郎、堀口一男、堀口春男、そして最後は姉の堀口トミであるこ

とが記録に残っている。

これまでは岩波文庫の『五足の靴』をはじめ野田宇太郎著の紀行文でも、さらに地元天草の広告パンフレットなど全て「茂助」という名前前で固定されていて、茂助という一人の人物が存在しているかの如くであつた。

生き証人、堀口静雄さんの話や、手元の各種資料、さらにロザリオ館の山下さんの話、加えて時代の符節から推察して茂助は「森口茂吉」さんに間違いないとなつた。驚いたことに森口家と堀口家は近い親戚で、茂吉さんは静雄さんの大叔父に当たる人で、記憶によく残っているという。

西日本では、目上の者が年下のものを呼ぶ時、名前の上半分に「ズスケー」をつけ、「〇〇スケー」と呼ぶ風習がある。神父は親しみを込めて「茂助」と呼んだに違いないと思う。

堀口さん宅を辞し、天主堂近くの堀口・森口両家の墓地に寄つた。昔

の古い墓はなく、両家とも頭部にクルスをつけた大きく立派な墓に改装されていた。両方とも帰天した一族の名前が刻まれており、当然ながら森口家の墓には「ヨハネ茂吉」の名

堀口家の墓



新しい森口家の墓。「ヨハネ茂吉」の刻銘がある。頭部にはクルスあり

がある。彼岸の彼方をキリスト教ではヘヴン(天国)と称している。彼の地で「パアテルさん」ことガルニエ神父は慈愛を込めて「茂スケー」「チビスケー」と呼んでいるに違いない。地元ご自慢の「天草の夕日」がまらでご来迎の如くして墓をやさしく包んでいた。

私のパアテルさんと茂助探しの旅は、この両家のお墓に額ずいて一応終わることになる。

しかし、人々の耳目に触れず埋もれたままになつてたこの『五足の靴』は、個性豊かにして才気溢れる五人の若者が自分流に書いた型破りな紀行文であるが、読む程に誠に面白く、異色の優れた紀行文であると思う。文中一部、現在では違和感のある言葉はあるが、地方色を率直に表現し

ており、そのうえ天草が主要舞台となつていることから特別な親近感を覚える。

以上のことから私としては文中、心に残る素晴らしいところや、珍道中のやりとり部分を蛇足ながらまとめて、この拙稿の終わりにしたい。

【とみなが・かずのぶ／山口市】  
(つづく)



『五足の靴』の5人が無理矢理泊めてもらった旅館。現在は高砂屋旅館

# 「老いらん」道中 ⑤

——元気に暮らす読者の「秘術」



手は動かなくても、周りのために祈ろう  
全部をなし終えたら 臨終の床で  
自分のために祈ろう

「主よ、十分です」と

祈りとあがき

東喜代雄 (83歳)

んなもんだと笑っている

84歳 ささやかな祈り

普通にきょうを歩み 静かに明日を迎える

周りが元気いっぱい歩んでも ねたまず

人のために働きたくても 謙虚に人の世話になる

身体が言うことをきかなくても その

老いの重荷は神のたまもの なにが  
できなくても

それを謙虚に受け入れる  
やりたくても休み 話したくても黙  
り この世の鎖を二つずつ外してい  
く

神は最後に一番良いものを残して  
くださるだろう

84歳 現実のあがき

朝から晩まで頭をひねり からだ  
を鞭打ち ため息をつく

人に会い パソコンに向かい また  
宿題をもらう

だれか少し手伝ってくれないかなと  
つぶやく

天候や機嫌に関係なく 渦潮の流  
れを泳ぎまわる

朝も昼も夜もなく 泥のように眠  
りにつく

いつまで続くのかなあと だれにと  
もなくあらがう

振り返ってみると 健康なからだ  
貧に処するごと

親と周囲にもらった 珠玉の宝物だ  
もつともつと そしてもつと 感謝  
しなくつちや!

笑いと幸福感

花田 淳 (66歳)

只今66歳の私は、へたばらない為  
にはとにかく何にでも好奇心を失わ  
ないこと、と考え今を生きています。  
これには先立つものが極めてしつこ  
く絡んでくるのですが、諦めてはい  
られません。物事に常に興味を持つ。  
さすれば研究し学ぶことを忘れな  
い。体が疲れてくると寝る。たつぷ  
りと。その興味への夢を目標を、意  
欲を失わないようにしています。今、  
完璧に出来ていなくても大丈夫と言  
い聞かせます。

もう一つは、一日に一度は喜怒哀  
楽を体感することを、自分に言い聞  
かせています。笑いと幸せ感は極め  
て大切です。TVを観ても、安つ

ぽいですが笑うこと。人と会って冗  
談を交わして笑う。人と比較しての  
幸せ感ではなく、良い行いでの幸福  
感ですか。余り経験がないですけど、  
悲しみや辛さを共感して涙を流すこ  
とは大切だと思います。今の安倍政  
権での世の中は我々庶民にとっては  
最悪で、怒りなどには事欠きませ  
ぬ。

【はなだ・じゅん／人吉市】

【ひがし・きよお／埼玉県狭山市】



この欄への投稿の目安は一件につき  
400字、何件でも可。住所・氏名・  
年齢を明記のこと。締切は毎月5日。  
宛先 〒868-0015  
人吉市下城本町1436-4の3号  
人吉中央出版社内「くまがわ春秋」  
編集部宛て

## 稲留二郎の世界④

## 球磨弁まっ出しで綴る



前田一洋

余りのことに酒肴の代はうち忘れて紺屋町の十文字より二日町を目当てに急ぎ行く。そらそら説教所のお阿弥陀様、さあお賽銭を上げようや、あら錢袋は無か」

## 蛇足解説

錢袋をうち忘れたことを「うち忘れ」て、たまさか通りかかった「お説教所」で賽銭を上げようとなりましたが。さて、この説教所とはどこのことでしょう。そうです七日町にある現在の真宗本願寺派「人吉別院」ですね。説教所のあった二日町は後に七日町に編入。

実は明治時代になるまで、この球磨人吉地方には真宗（一向宗）の寺院は一ヶ寺もなかったのです。それは人吉藩がその信仰を固く禁じていた

トラックや乗用車が普及していなかったころ、「車」と言えば馬車や荷車、そしてリヤカーなど。それにお医者様や贅沢な人が乗る人力車程度でした。それで「おまいどまきゅう（今日）はいさぎゅうだったって（着飾って）どきいじったな」と問われ、「ひていし（人吉に）町見きゃじやったばい」などと答える時には、汽車の他はすべて徒歩でした。

さてカミヤゲ（上球磨地方）から出て、ございた初老の夫婦（湯前線開

通は大正十三年なので二人は歩き通し）、十軒町への食堂に入り酒肴を注文。「客、酒を呑みて飯を食てそろそろ出掛かくれど、ちっとばかりの酒がキケたかと、またひゃー上がりて高イビキで二時間ばかり眠りたりしに」、なんとというノンビリした時代であつた事でしょう。

「雷の二声ハンコロトウと鳴る音に、皆目が覚めて、これどうか寝忘れたり。もう遅うしなつた、さあ行くや行こうやと心急ぎて出て行きて、

からでした。しかし明治維新になり信教の自由が保障されますと、真宗のお寺が別院をはじめ二十六ヶ寺もできたのです。（実際には「西南戦争」が終わった後から）

しかし考えてみれば、まことに不思議な現象ですね。それまで一人の信者もいなかったはずなのに、明治六（1873）年以降突然、数千人にも及ぶ夥しい門徒が出現したのですから。それは十六世紀の中ごろからの厳しい禁制の網目をかいくぐりながら、いわゆる多くの「隠れ門徒」がいたからでした。

そうした人々は「仏飯講」とか「名号講」「二十五日講」などという秘密の組織を作りました。そして肥後領の葦北や八代、さらには阿蘇の寺と縁を結び、「南無阿弥陀仏」の信仰を

守つて来たのでした。またご承知の山田伝助などのように、命懸けで直接京都の本願寺への寄進をしに行った人もいたのです。従つて賽銭を上げようとしたこのトトさん力カさんも、元は「隠れ門徒」だったのかも。

「これはしたりしたりと、また来た道を引き返して鍋屋で聞けば、以前の酒肴の代はうち忘れたを思い出して、その事わけを言う。また錢袋を取り落とした事を言うて、錢袋を受け取り、酒肴の代も払うて二日町に戻り、一文上げて南無阿弥陀仏と、空念仏を唱えてソソソソとして立ち帰らり」という事に。

## 蛇足解説

一体何のために「出て来た」のやらわかりませんが、この当時はただ道中

の町を眺め、酒を飲んで飯を食つて帰るだけでも、楽しいレクリエーションだったのかも知れませんね。三十年前には武家屋敷が続く新馬場、それが今では商店街に。廃寺の跡地には学校が出来ていたり、貧乏町だったところに大きな店や料理屋ができ仲々の繁盛ぶりであつたりして。

そうした人吉の城下町が出来たのは十六世紀の終わり頃。つまり秀吉の朝鮮出兵をはさんで、二十代藩主相良長毎の時代。人吉城の造成と平行之して、それまで青井神社の周辺にあつた町を現在地に移し拡張したのでした。二日町、五日町、七日町、九日町はかつての「日切れ市」の名残り。職人町の大工町、鍛冶屋町、紺屋町など現在も残っています。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

# ウルトラマンはなぜ偉いのか

久馬 俊

酒屋さんの隅に、正規の商売でなくどうもスミマセンみたいな雰囲気酒（焼酎）を販売している一角がある。「角打ち」という。関東の「立ち飲み屋・二杯飲み屋」である。スルメとかゆで卵などを酒の肴用に販売していて、「とりあえず、ビール」という定番コースでなく「現金を渡すから早く、酒吞ませろ」的な場所である。そんなに急いで一体どうするんだと言いたくもなるが、酒に飢えたお客さんを待たせないところに魅力がある。現金取引もいい。現金取引だと採め事はおきない。現金を出せば、直ぐに、コップ酒がでてくる。以前は肉体労働者風の客が多かった。最近では、ホワイトカラーも目立つ。30歳代、場合によっては20代の美女も出没するようになった。酒の肴も多様になっている。ずいぶん昔の話だが、その角打ちで、1個100円のゆで卵をそれぞれに購入している一群をみかけたことがある。ゆで卵に塩をかけたので、ゆで卵を肴に、酒を呑むのかと

風車の弥七、お銀、飛び猿など登場人物も話題に欠かせない。越後屋がか弱い娘の帯を無理やり解こうとする場面、お銀の入浴場面も話題になる。

男たちが、そうした馬鹿げた話に夢中になっているなか、30歳代の美人は会話に加わらず、タバコを吸いながら、ゆっくりと呑んでいた。ウルトラマンや月光仮面の偉さが分からないのかもしれない。あるいは失恋の悲しみに耽っているのかもしれない。ひとり、コップ酒を飲むだけだった・男たちは美人に声をかけなかった（例外あり）。礼儀正しいからではない。お酒オンリーの方針を堅持しているからである。ひと



ときり呑んだあと、「さて、別の店に行つて一杯やろうか」といつて男たちは店をでていった。さきほどまでの酒は、本格的飲酒行動に移る前の準備運動にすぎなかったようだ。知らぬ間に、ゆで卵も食べていた。美人も姿を消した。そのあと、どこへ向かったかは分からない。たぶん、「別の店」に向かったであろう。

予想していたらちがった。塩を舂めるだけで、ゆで卵自体には手をださないので。ゆで卵に塩をふる、そして塩を舂める、それをくりかえしている。確かに酒には塩が合う。升の角の塩は格別だ。ゆで卵の塩も機能的効果としては同一であろうが、見た目はちがう。前者には風情があるが。ゆで卵の塩はそこはかとなく、わびしい。

その一群の会話は面白かった。ウルトラマンは立派だ、宇宙の果てから、わざわざ地球に来て、よりによって日本を守ってくれている、だから偉い、というのだ。客のひとりがそのように話すと、他の客が、そぎゃん、そぎゃん、と応じて話はもりあがった。タダ働きつてことはないだろう、ウルトラマンに一杯おごつてやらんば、あからんたい、そぎゃん、そぎゃん、とウルトラマンへの礼賛はつづく。反論がでるときもある。月光仮面がもつと偉いのではないかというのである。ウルトラマンと月光仮面のどちらがえらいかといったって、そもそも比較できるのか。正義の味方同士と比較である。結論はでそうにない。こういうときには、水戸黄門も登場することになる。越後屋という商人の悪行、その悪行の背後にいる次席家老の横暴を黄門さまはすっきりする形で解決し、それが角打ちの人々の共感を得る。助さん、格さん、

正義の味方といえば桃太郎を外すわけにはいかない。村に侵入し財物を略奪した罪を問ひ（侵入・略奪行為を実行していないとの説もある）、鬼たちに制裁を加えた。桃太郎が村の住人だったのかどうかは定かではない。住民であったとする説と外部者であったとする説が対立している。しかし鬼の陣地を直接に攻撃したことに異論はない。桃太郎の行爲は自衛権の発動といえるか。犬、猿、雉は桃太郎の同盟軍としてキビ団子提供の約定に基づき行動したが、彼らの行動は集団自衛権の行使にあたるのであろうか。専守防衛の観点からみると、桃太郎の行動は自衛権の発動に該当しないようにみえる。犬たちの行動もそうである。

ウルトラマン、月光仮面、水戸黄門、桃太郎はいずれも正義の味方である。しかし、その正義のあり方についてはもう少し検討すべき余地があるよ。いずれも、最初から正義の存在として定義づけられていて、いわば現実を超えた（カント的にいえば、超越論的な）外部者にほかならない。正義と不正義のベクトルのもとにある現実の正義の在り様をそこには反映していない。

アメリカはウルトラマンであろうか。アメリカの行動はつねに正しいのであろうか。かつて日本はアメリカを「いざ

# 漢和字典は面白い

12 鶴上寛治



い、「ミニッツ、マッカーサー」と呼び、「鬼畜米英」と罵倒していた。  
危険な暑さのなか、とある角打ちで、そういうことを考えた。8月は、どうしても、そういうことを考えてしまう。角は斜めにしか打てない。しかし、角打の人は香車の人である。汗を流して働く香車である。香車はときには玉を打ち抜く。越後屋も次席家老も香車を馬鹿にはならぬのだ。

【きゆうま・すべる／八代市】

を指していた。アメリカの大統領も、いつか「悪の枢軸」とかいつて、具体的な国の名前を挙げ物議をかもしたことがあった。この字は「とぼせ」という訓読みがあるように、〈開き戸を開閉する軸となるところ〉である。〈そのように引つ込んでいるからとぼせ（戸の臍）〉。それに差さしこむ方は、出っ張っているから〈とまら〉といった。そこから《かなめ・大切などころ・真ん中・天子の位》などの意にも広がっている。枢密院・枢機卿なんて、普通の人々より数段上のお偉いさんに聞こえてくる。

## 枢

枢軸国とか  
いう言葉があった。それは昭和前期、ファシズム三国（日・独・伊）

## くまがわ春秋歌壇

いもこ短歌会

警報の出ているさなかに宴を張るアベ真ん中の赤坂自民党  
災害の対策脇に三選の票固めするこの国の首相

柳原 三男

阿蘇谷の緑の深き草原に牛馬の群れを風なでてゆく

坂本 ケイ

さわやかに風の吹きくる裏山にウグイスひぐらしホトトギス鳴く

上田 廸子

知らぬまにかなわぬ手足で拍子とり孫打つ太鼓に見とれておりぬ

宮川しのぶ

庭先に夫が播きし朝顔の花を数えていざりハビリへ

上田 精一

嬰兒の炎昼の中深眠り健やかな汗は命の糧か

雲の上頭出したる市房の山麓に生きる卒寿の父よ

同胞の名を撫でる手のしわ深し強き日差しの平和の礎

目の泳ぐ首相の顔の大写し中三少女の詩の朗読に

## 慕

〈したう〉のだが、大体下の者が上のものをしたうのが普通。漢和字典には《恋しく思う・懐かしく思う・たつとぶ・ほしがる》の意だとある。字形は〈心十莫〉で、莫は《もとめる》の意。そこで《心の中で求める・こいしたう》となる。男女間の感情は？——多分対等だろう。お互い様。白楽天の「長恨歌」の中には、この情を〈慕慕之情〉と表現されている部分がある。発音するともちよつとやばい。

## 蠣

音はレイ、この字が単独で使用されることは少ない。我々が目にするのは「牡蠣（カキ）」ぐらいだ。この語の中に（牡）の字が入っているからには、あの牡蠣はすべてオスなのか、牡蠣の雌雄の別はどうやって見分けるのか？ 興味津々——。結論！ 牡蠣は雌雄同体でオス・メスの区別はない。これには参った。カタツムリやミニミズもそうだった。それが当たり前で、人間も昔はそうだった、とプラトンは説き、今は別体になっている男女が、元の完全な姿になるうと求め合う心をプラトニック・ラブと呼んだ。

【つるかみ・かんじ／人吉市】

生誕 450 年  
記 下ろし  
書

# 小説・相良清兵衛

⑧

山口啓二

清兵衛屋敷の奥座敷に通された蔵人佐鉄斎は仏壇に向かい、一年前に八十五歳で亡くなった清兵衛の父・犬童美作休矣の仏前で、ろうそくと線香に火を付けて手を合わせ、短い経を唱えた。それが終わった頃合いをみて清兵衛はまた昔話を始めた。

「安遍ではあの時の殿の御英断があればこそでござった。そう言えば街割りのこと、拙者も先の御家老深水宗芳殿と共に伏見の秀吉公を訪ねた折に街並みは見えて参ったが、あの店々の裏が細長い住まいとなり、更に庭が設えてあるとは思いません。宗芳殿も亡くなられて既に昨年は十七回忌にござりました」

「ほう、深水宗芳殿とはまた久しぶりにお聞きするお名前、懐かしゅうございますなあ。拙者あの方がお亡くなりになります前に、殿へのお口添えがあったからこそ相良家に戻ることが叶いました。戦術ばかりではなく歌も句もよく詠まれた、なかなかの知恵者にして切れ者にござりましたよの

【前回までのあらすじ】父休矣の後を継いだ清兵衛は、藩内の本格的な基盤整備を進めていった。そして時々思い返すのはかつての朝鮮出兵のことであった。

う。太閤秀吉様は『連歌の師』と明言された由に御座いました。ちよつど拙者は肥前松浦に居りましたが、お噂は肥前でもすぐに耳に入りましてござる」

深水宗芳は歴代相良家に仕える筆頭家老の中でも武芸に秀で、特に俳句と詩歌が上手く、かの太閤秀吉も我が師と認めるほどの歌人であった。が、朝鮮に出陣する二年前に病気で亡くなっていた。

二十年ほど前の天正十五（二五八七）年四月、秀吉が九州統一の折、島津を手中にする頃、相良家筆頭家老深水宗芳は、八代で秀吉とのお目見えが叶った。島津討伐の為に秀吉が八代に到着するとの物見の者からの知らせが入り、島津

の命で都城にいる頼房公に早馬を走らせ、宗芳はすぐに公の弟である長誠君と共に八代に陣を構えた秀吉の宿へと向かったのだ。だが秀吉の本陣は秀吉に懇願する者の出入りが激しくごった返していた。門番にお取り次ぎを頼ったが、会える様子はいっこうに無かった。すると屋敷から出てきた変わった風貌の二行に長誠君が興味を持たれた。

十歳になったばかりの長誠君は、初めて見る異様な恰好をした人物を見て宗芳に尋ねた。

「宗芳、あの背の高い者たちは何者じゃ」

「あれはバテレンという異国から来たキリシタンの僧にございます。かの者たちも関白殿下にお目見えして、かつては相良家臣であった八代衆の多数の捕虜の命を救ったそうにございます」

そのあと手を尽くして太閤秀吉とのお目通りをうかがったが、上手く行けば明日なら会う事が出来るであろうとの事となった。翌日は早朝より出掛けてその番を待った。それでもようやく昼前に秀吉にお目通りが叶ったのだった。

「恐れ多くも関白殿下の御尊顔を拝し恐悦至極にございます。拙者相良家二十代当主頼房が家来、家老の深水宗芳と、頼房殿の弟君・長誠公にございます。ただ今我が殿はいまだ島津と一戦を交えており、取り急ぎ本日我がご挨拶に参上いたしましたにございます」

「ほう、あの相良の身内か。苦しゅうない、面を挙げよ。して何用じゃ」

今日の秀吉は島津との和睦が出来そうで機嫌が良いのか、笑顔で二人に声を掛けた。

「は、わが相良家、遠州藤原家の血筋にございますれば、球磨の地を安堵され四百年の間、かの地を護つてまいりました。殿下におかれましては、相良の益々の安泰を切に願います。次第にございます」

「そうであったよのう、相良家は鎌倉以来ずっと球磨を護つて来られた。よし判った深水、主君に申し伝えるがよからう。この儂の元に尽くすならばもちろん今後相良は安泰じゃ」と

「ははっ、お聞き入れ下さりまして有り難き幸せにございます。後日我が主君頼房公がお目通りに参る所存ですが、ひとまずこの事を我が殿に申し伝えに参ります。本日は誠に

## ■主な登場人物

相良清兵衛（犬童頼兄）＝相良家 家老  
相良頼房（長每）＝相良家 第20代当主  
深水宗芳＝相良家 筆頭家老

有難うござりました」

宗芳に合わせるように長誠君も秀吉の前にひれ伏し礼を述べた。

「関白殿下秀吉様、我が相良家の領土を安堵いただきまして、誠にありがとうございます。かくなる上は長誠、兄・頼房と共に豊臣家に、秀吉様に尽くす所存にございます」  
精いつばいの口上をやつとの思いで言う事が出来た。まだ数え十歳になったばかりである。

「おう長誠とやら、大義であったのう。こたびは御苦労であった。あとは儂に任せるが良い。ささ、こちらへ来られい」  
するとまだ子供の長誠を手招きし傍へ呼んで、秀吉は持っていた扇子と傍にあった茶菓子を持たせたのであった。これには宗芳も大変驚いた。三成をはじめ、傍にいた用人達も目を疑ったくらいであった。しばらくの会談が終わって宗芳たちは本陣を出たが、二人とも首尾よく領地を安堵された喜びと、極度の緊張で冷や汗が止まらなかつた。なんとか急場をしのぎ、取り敢えず相良家は存続の危機を脱したのである。

その頃頼房公は、休矣や内田伝右衛門、岡本河内、それに軍七らと共にようやく球磨に帰陣した。しかし今まで薩

いに思えた。

「お願いでございます、関白殿下にお取り次ぎを。拙者相良頼房が家来、犬童軍七と申します」

つかさず取り巻きの連中が寄ってきて軍七を取り押さえるにかかった。するとその若武者は取り巻きを制し、

「なに、相良殿のご家臣とな。拙者石田治部三成である。はて、先日もそちの御家老深水殿と弟君が参られたではござらぬか。して今日の用向きは」

「は、誠に恐れ入ります。本日我が当主相良頼房様がこの度の領地安堵のお礼に伺った次第にございます。ここで足止めをされましたので後ろのほうで途方に暮れておりました」  
宗芳も休矣も軍七の急な態度をあっけにとられてその始終を見入っていただけだった。

「おう、深水殿が先日みえて、そのように申しておられたのであったな。あい解り申した。その儀は拙者が引き受けるゆえ、この奥でしばし待たれよ」

ほどなくして、なにやらやり取りを交わす軍七と三成の間に、慌てた休矣と宗芳が割って入った。

「誠に恐縮ですが石田三成様とお見受けいたします。拙者相良家家臣犬童休矣、愚息の御無礼どうか平にお許しを」

摩の旗本として共に義久に仕えた菱刈源米衛は、一度に皆が戻れば島津に疑われる恐れありとし、しばらくは薩摩に残る事を休矣に申し出ていた。

「よくぞ申した源米衛、そちの妻と幼子の事は心配いたすな。わしが必ず引き受けるゆえな。それと、事が一段落したら急ぎ帰郷いたせ」

「かしこまりましたでございます。では妻と子供たちのこと、何分にもよろしく」

帰陣の折に真幸で討ち取った島津の兵五十人余りの首を獲り、それを秀吉への手土産とする算段であった。頼房公はその足で、宗芳、休矣、軍七らを従え人吉から秀吉のいる佐敷へと向かった。人吉から佐敷までは急いでも丸二日かかった。

翌早朝、一行は太閤秀吉公の宿へと向かったが、秀吉は以前にも増して多忙の様子で、取次方に何度申し出ても全く受け入れてもらえなかつた。勿論堅い警護に守られ、直訴するすべもなかつた。

するとそこへ騎馬の軍団が屋敷内へ入るのが見えた。軍七は集団を離れその中の先頭を走る白い馬の前に立ち塞がり取り次ぎを願い出た。歳のころは亡き深水撰津介と同じくら

休矣は三成が秀吉の一家来である事を知っていた。すると三成は、

「いかにも拙者が石田三成であるが、そなたが軍七殿の父君か。おお、深水殿も御一緒でござつたか。ここでは話が出来ますまい。案内いたすゆえ付いて参られよ」

一行は馬から降りて館に入る三成のあとに続いた。歩きながら宗芳は、

「関白殿下はごなともお会いなさらぬと聞き及んでおりましたが」

「ななに、次から次から関白殿下に懇願する者が多く、殿下から拙者に見極めをするように命ぜられたのでござる。相良殿は由緒ある家柄ゆえ必ずや会われるはず。どうかお任せください」

「左様でしたか。先だつては主君が戦に出ておりましたので私と弟君の拜謁でございました。ようやく治まりましたゆえ今日のお目見えと相成りましたので、よろしくお取り計らいの程を」

案内された控えの間でしばらく待つてしていると小姓が迎えに来た。

【やまぐち・けいじ／人吉市】

# 糸山秋子 『離陸』 (文春文庫)

2017年4月10日

上村 雄一

単行本2014年9月(文芸春秋) 初出…文学界  
2012年1月号から2014年4月号(途中、中断あり)

## 八代を舞台にした小説

この小説の舞台のひとつは八代市である。著者は芥川賞作家。芥川賞に特別の権威を与える必要はないにしても、なぜ、同賞受賞作家が、なぜ、



糸山秋子『離陸』

八代を小説の舞台にしたのかは気にはなる。作者は東京生まれで八代はもちろん熊本県にも縁があるわけではない。その作家が八代に注目したのである。

その理由は本書中に示されている。荒瀬ダム撤去工事に彼女は注目したのである。地元の人には荒瀬ダム撤去をそれほど重大な「事件」とは認識していないようにもみえるが、全国的にはそうではない。

主人公は東京大学を卒業後、国

けれども、そのわずかな部分に本書全体の基調になる問題が要約されていることに読み手は気づくはずである。

「八代河川国道事務所」と同じく、その内容は事実には忠実である。国道219号線、肥薩線、球磨川第一橋梁といった名称だけでなく、支所を「やぐば」と呼ぶ言葉遣い、そしてなによりも、荒瀬ダム建設以前の姿を再現しようとして大きな地図に瀬・淵・

岩などを描き入れている八代市坂本町の住人(坂本村時代の元村議)の描写は事実そのもので、その住民がだれであるかは容易に特定でき、小説というよりはルポルタージュに近い描写である。荒瀬ダムの竣工時を昭和28年とする誤記もあるが(同年はダム建設開始年である)、誤記はその一点にかぎられるというほどにその内容

は正確である。「球磨川第一橋梁」についていえば、その名前が登場するにすぎないが、本書全体の鍵概念のひとつであることを看過すべきではない。

八代と熊本の関係、さらに博多の関係の描写もリアリティがある。そのリアリティは開高健が処女作『あかみあ めらんこりあ』(1951年)で描いた世界と同一である。

## 離陸

本書は八代だけを舞台にしているわけではない。国交省入省直後の国

## 開高 健



開高健『あかみあ めらんこりあ』(角川文庫)

士交通省に入省したキャリア官僚で、八代には、同省の「八代河川国道事務所」の所長として赴任している。周知のように、同事務所は現実に存在する実名の国の機関で、その所長であるから、一定の経歴を経た人材であると理解するかもしれないが、彼はそのとき30歳台半ばで、本省でいえば、係長か課長補佐クラスである。特に有能というわけではないが、格段に劣っているというわけでもない「平均」的ポジションという感じであろうか。

役所のキャリアとはそういう存在である。糸山さんは、キャリアのそうした位置をさりげなく、しかし、うまく描いていて、その部分だけをきりとりても作者の力量があらわれている。

荒瀬ダム撤去に直接にかかわる部分は全体からみれば数頁にすぎない

会対応時代、八木沢ダム(群馬県)への出向時代、ユネスコ(パリ)への出向時代など舞台は多様である。八代時代も八代だけを語っているわけではない。全体としてみれば、タイトル「離陸」をテーマにした小説である。「離陸」というとき、直ちに問題になるのは、何から、どこからの「離陸」なのか、目的地はどこなのか、にある。

この作品は、死を「離陸」と表現するときが多いが、あくまでも死は比喻にすぎない。人間あるいはダム「死」(ダムの場合)、ダム撤去が「死」にあたるだろう)が問題ではない。不幸の連続のなかに人間の生はあるというモチーフも本書の基調になっているが、幸福と不幸は互い違いにあらわれるといった単純な

問1 これまでにサッカー・ワールドカップ（W杯）が開催されたことのある都市をあげよ（例：東京）

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )
- ⑥ ( )
- ⑦ ( )
- ⑧ ( )
- ⑨ ( )
- ⑩ ( )

問2 芥川賞受賞作家を5人あげよ（例：糸山秋子）

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )

問3 くまがわの支流を5河川あげよ（例：川辺川）

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )

問4 幕末の志士の名前を5人あげよ（例：西郷隆盛）

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )

問5 次の写真の名前を書け（ヒント：本誌28号）

① ( )



② ( )



人間の生・社会は水に似ていると作者はみている。山に降った水が川

水

梓組を作者は示そうとしたわけでもない。そうした大枠を意識しつつも、その大枠の細部をみると、そこには多様な生があること、その生を人はそのときには本当には理解していないのではないかといつた作者の疑問がさまざまな形で触れられている。あるとき、突然、人は脳出血で死ぬことがある。それも「離陸」（天に向かつて）であるし、ビジョンをもった「離陸」であるときもある。つねに「前に進む」、一度スイッチを入れたら「前に進むしかない」とはかぎらない。幸福と不幸の入れ替わりを理解できずにいる者もいる。

前に暮らしていけることに、満足している。」

「身近に水を感じながら暮らすのはいい。ダムでも、川でも、海でもいい。陸地、そして人間の世界は決して無限なんかじゃないことを意識していられるからだ。もちろん海だけ無限ではない。無限かどうかわからないのは宇宙と、そして過去にあったかもしれない可能性だけだ。ぼくは陸地の端っこで当たり前に暮らしていけることに、満足している。」

**考古学はドラマだ。**

肥後と球磨  
その原史世界に魅せられし人々

肥後と球磨の考古学史

木崎康弘

※九州内の紀伊国屋書店を中心に熊本市内の主要書店  
全店舗の書店・Amazonにて取扱中。

■A5判/約600頁/上製本 ■発行元  
■定価3,000円(+税)送料200円 人吉中央出版社

この一文は、主人公のエリート官僚の率直な意識として理解している。

【うえむら・ゆういち／本誌編集主幹】

※答え合わせは次号でおこないます。前回の答え合わせは86頁で。

このコーナーは、「二行書きによる〈切れ〉と〈取り合わせ〉を取り入れたHaiku」を提案している『俳句大学』facebookページからの転載です。

<https://www.facebook.com/groups/1805562046390300/>

Castronovo Maria  
●  
Aurora boreale -  
la coda di una balena tra cielo e mare  
[Commented by Mitsunori Nagata]  
Under heavenly body show, a whale  
sinks with his tail up. Toriawase of the  
aurora in the heaven and the whale on  
the sea, an enormous scene in the Arctis  
Circle is well described.

カストロノバ マリア  
●  
北のオーロラ  
空と海の間の鯨の尾  
〔永田満徳評〕  
天体ショーを繰り広げるオーロラのもと、鯨が尾を揚げて沈む。天上のオーロラと海面の鯨との取り合わせによって、北極圏の広大な情景が描き出されている。

Sarra Masmoudi  
●  
solstice d'été  
la queue du chaton dépasse du bac de  
menthe  
[Commented by Mitsunori Nagata]  
The tail of cat is a fine description and  
Toriawase with the summer solstice is  
equivalent to the famous Haiku of Fukio  
Shiba [long day, chicken has gotten over a  
fence]

サラ マスモウディ  
●  
夏至  
猫の尻尾はミントの花壇を越える  
〔永田満徳評〕  
「猫の尻尾」とは細かい描写で、1年中で昼間が最も長い「夏至」と花壇を越える猫との取り合わせは、「永き日の中にはとり柵を越えにけり 芝不器男」に匹敵する。

Rina Darsa  
●  
a little girl with the smiles  
strawberries on the top of ice cream  
[Commented by Mitsunori Nagata]  
A girl is stuffing her mouth a  
strawberry with the happy smile.  
The figure of a charmong girl is well  
described.

リナ ダルサ  
●  
笑顔の少女  
アイスクリームのでっぺんに苺  
〔永田満徳評〕  
少女が甘いものを食べる喜びで笑顔を浮かべながら、今にも「苺」を頬張ろうとしている無邪気な、愛くるしい少女が活写されている。

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

外来語から学ぶ英単語 (29) …… 藤原 宏

コーヒー と カフェ  
coffee cafe

coffee (コーヒー) はアカネ科に属するコーヒーの木 (coffee tree) の果実から得られた嗜好飲料の一種です。原産地はアフリカのエチオピア南西部で、この地方の Kaffa (カファ) という地名が coffee の語源です。コーヒーは 15 世紀頃アラビアに伝わり、トルコを経てイタリアに caffè (カフェ) として伝わりました。このイタリア語が 16 世紀頃からヨーロッパ諸国に広がりましたが、語形上「a」型と「o」型に分かれました。

わが国には 17 世紀の初めに長崎のオランダ人によって、koffie (コッフィー) が音訳されて「珈琲」として伝えられました。しかし、実際にコーヒー店ができたのは 1878 年 (明治 11)、神戸の「放香堂」が最初です。

cafe (カフェ) はフランス語で、フランスではコーヒー又は軽食のとれるコーヒー店を意味しますが、英語に借用されてからは、特にアメリカ英語では酒場の意味が強くなり、わが国でも大正から昭和にかけて洋酒酒場として賑わいました。しかし、その多くは終戦後、ホステスのサービスで飲酒するキャバレー (cabaret) に姿を変えました。 (396)



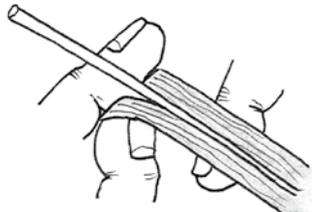
なごり…  
げっかん・ぎびょう

— 加計・森友の疑惑をかかえた国会は、カジノ法案強行採決して閉幕 —  
国政を私物化してきた安倍首相は、残り3年政権の座をめざし改憲の道を進もうとしている。「なんとかならないの」の声広まる。

# おっとわっとあすび その⑩

絵と文／松舟博満

ちよこつと採つぎや行く  
とん遅すうひなれば、  
中ん花穂に色んちいてて  
硬うひなつて、食いぎや  
ならじやつたで「ババン  
なつとる」ちゆうて、ツ  
バナ採りは、しまえ(終)



から打ち折つて、七  
寸ぐりやに先ん方ば  
つん切つてうしてて、  
元ん方の芯の双方ん  
葉ば一寸ぐりや芯に  
そつて引きしやあて、  
そん葉は合わせて親  
指と人差し指で強う  
挟すうで持つて、反

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇  
神社・文化苑「童遊館」】

## ツバナとアマネと弓矢

春んひなつて草の伸びきやうつた  
てば、ツバナ採りんいそがしゆう  
なつた。マカヤちゆうカヤんぐたつ  
草で太うなれば二尺ぐりやん高さ  
んなつが、芽の出始めんこら花穂  
んなつとこんの一番に出てくつて、  
そん花穂ば引き抜いて、中のまだ  
白うして柔らしか花穂んなつ所つ  
ば、「ツバナ」ちゆうて食  
いになつた。

たが、今度はススキんなるカヤん  
花穂ば同じごてしてくいおつた。  
「アマネ」ツバナんしまえゆれ  
ば、今度は根ば掘つた。根  
は竹んムチんごて泥ん中ば這うて  
さりいとつたで、その先ん方の  
新しか所つば採つて、泥ば落てえ  
て皮ばむしつて、ガシガシやつて  
噛んしやあてみれば、甘かつた。  
「弓矢」葉の長んかとおん出て硬  
とうひなれば、なつだけ根元ん方

対ん手の人差し指ば葉の下に入れ  
て、人差し指で挟すうどる親指ば  
強う擦るごてすれば、挟すうどつ  
た葉は二つん引き裂かれ、芯の方  
は、先ん方さみや飛うで行きおつ  
た。  
カンヅめんカラば的んして、射  
る所んに線ば引いて、そつぞれ何  
本づつて決めてうえてん的当てで、  
あんまり当たりすぎれば、線は遠  
おうひなつた。  
的当てんほつと(飽きる)すれ  
ば、今度はだつがとが一番遠うま  
で飛ぶかの競争んひなつた。

## 前号【くまがわ学習塾⑱の答え】

問1 「五足の靴」に登場する5人の若者の名前を書け

- ① 与謝野鉄幹(寛)
- ② 木下杢太郎(太田正雄)
- ③ 北原白秋
- ④ 平野万里
- ⑤ 吉井 勇

問2 次の漢字を読め

- ① 鱧口( わにぐち )
- ② 筏( いかだ )
- ③ 木綿葉川( ゆうばがわ )
- ④ 茅葺( かやぶき )
- ⑤ 鑑内橋( かんないばし )

問3 オリンピックが開催されたことのある都市名を書け 例:東京

- ① ( アテネ )
- ② ( パリ )
- ③ ( セントルイス )
- ④ ( ロンドン )
- ⑤ ( スtockホルム )

問4 次の四字熟語を完成させよ

- ① ( 漱 ) 石枕流
- ② 水髓方 ( 円 )
- ③ 曲学 ( 阿 ) 世
- ④ 自 ( 家 ) 撞着
- ⑤ 頂門 ( 一 ) 針

【前号訂正】最後の「四、は誤りで、「世、に。

問4 次の写真の名前を書け(ヒント:本誌27号)

- ① ( 安楽院 )
- ② ( 坂本駅 )



【前号訂正】問3④の解説文の冒頭「元老は、戦前日本で天皇の「補湿」を「輔弼」に訂正いたします。

## 編集後記

西日本豪雨（平成30年7月豪雨）は200人を超す死者と1カ月近く経った今もなお、約6万人に避難勧告と指示が出されたままの大災害となっている。国土交通省のまとめによると、今回の豪雨で堤防や護岸の施設に被害が出た河川数は452。約2万7千戸が浸水したという。過去に大きな被害を受けた球磨川流域に住む住民としては他人事と思えず今回、緊急特集を組んだ（36頁）。水害経験者の多くが指摘するダム放流問題については、つる詳子さんの「脇川の水害から：ダム問題を考える」（44頁）が詳しい。今回の災害が天災ではなく、人災ではないかという声が上がっていることを忘れてはならないだろう。★創刊時から連載が始まった「くまがわの駅・ものがたり」が今回の「村所驛」で最終回となった（12頁）。流域の魅力を伝える企画であったと思いつつ、松本晋一さんの労をねぎらいたい。★さて8月、先祖や故人に触れるお盆も近い。猛暑のなかではあるが、「この世界の片隅に」いろいろな人たちが暮らしていたことに思いを馳せたい。（ま）

〒868-0015  
熊本市下城本町1436-4の3号  
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部  
info@hiyoshi.co.jp  
電話・ファックス 0966-23-3759

## インフォメーション

### 開催中

- ▽夏季特別展覧会「八代の禅宗寺院とその寺玉」（～8月26日、八代市立博物館未来の森ミュージアム）
- ▽企画展「やまへの遺産展」（8月26日、山江村民俗資料館）
- 8月15日（水）
  - ▽第64回人吉花火大会（中川原公園・ふるさと歴史の広場）
  - 8月17日（金）
    - ▽夏休み子どもイベント「列車に乗って鉄道遺産散策」（JR人吉駅スタート）
    - ▽多良木町まびす夏祭り「盆踊り・花火大会」（多良木町多目的グラウンド）
  - 8月19日（日）
    - ▽夏休みおどんがプラモコンテスト作品展（～26日、あざぎり町免田ポッポ館）
  - 8月24日（金）
    - ▽第34回にしき夏まつり（錦町役場前広場）
    - ▽第12回球磨川音楽祭 ミニ木野雅之（あざぎり町須恵文化ホール）
    - 8月25日（土）
      - ▽くまがわカップカヌー大会（くま川下り人吉発船場）
      - ▽第72回天童球溪頭影音楽祭個人コンクール（～26日、人吉市カルチャーパレス）
      - ▽第12回球磨川音楽祭 ミニ木野雅之（ひとよし森のホール）
      - ▽第27回日本一の大鮎釣り選手権大会（球磨村）

※天候の影響により中止・延期になる場合があります。

### 匠の枝

御膳醤油  
（だし入り万能しょうゆ）

◆納豆みそ（お徳用）  
300円（税別）

◆みそ煎餅  
477円（税別）

◆納豆みそ  
477円（税別）

◆納豆みそ（お徳用）  
300円（税別）

◆みそ煎餅  
477円（税別）

人吉散策コース 九州初蔵 蔵めぐり

## みそ・しょうゆ蔵

合資会社  
丸カマ

釜田醸造所  
会長 釜田元嘉  
社長 釜田元顯

〒868-0001 熊本市人吉市鍛冶屋町16  
電話 (0966) 22-3164  
FAX (0966) 22-3165  
メール info@marukama.co.jp

# たけだ眼科クリニック

院長 竹田 憲司

人吉市南泉田町39 ☎23-3096

---

めがね・コンタクトレンズの

## アイウェア 榎

（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097

---

デイサービスセンター

ケアプラン作成所いずみ  
（居宅介護支援事業所）

## いずみ

協力医療機関 たけだ眼科クリニック  
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307